

〈論 文〉

## フォックスウェル「雇用の不規則性と価格変動」

小 島 専 孝\*

### I はじめに

フォックスウェル（Herbert Somerton Foxwell 1849-1936）<sup>1)</sup>は、マーシャルの後継者候補としてピグーに敗れたことで知られている。また、経済学文献の収集家として有名（ゴールドスミス文庫・クレス文庫はフォックスウェルのコレクション）であるが、寡作の人である。その中でケインズが「主要な独創的著作」（JMK vol. X p. 293）に挙げている「雇用の不規則性と価格変動」（Foxwell [1886a] [1886b]）は、〈アカデミックな経済学者が失業問題に取り組んだ最初の試み〉としてしばしば言及される。けれども、経済学説史研究で論じられたことがない。また、〈フォックスウェルは失業の原因を国際価格の崩壊に帰した〉という誤った記述も見受けられるので、本稿は、「雇用の不規則性と価格変動」を詳細に紹介する。

発端は、1884年春、エディンバラの匿名の紳士が、「公正と公平と両立する、産業の日々の生産物の資本と労働の間のより平等な分配を実現し、その結果、すべての人が物的快適さと知的文化の相当部分を享受し、品位ある生活を送ることを可能にする、また、より良い生活ができるようになる途上の諸困難を軽減させる最善の方法は何か」（匿名の紳士の言葉）というきわめて重要な問題を公衆に考え続けてもらうために、1,000ポンドの寄付を申し出たことである（IRC序文）。その申し出に対してフォックスウェル、ギッフェンなど7人<sup>2)</sup>からなる寄付金受託委員会が組織され、委員会は統計協会（Statistical Society）と共催で、1885年1月28日から30日の3日間ロンドン（プリンス・ホール）において「産業報酬会議 Industrial Remuneration Conference」<sup>3)</sup>を開催した。会議の後、かなりの額の残額が匿名の人物に返還されることになったが、全額を調査研究に使うよう要請されたため、1886年5月、6月、7月の3ヶ月間エディンバラ、グラスゴー、ダンディーの3都市において、フォックスウェル、（進化論で有名な土地所有制度改革論者）アルフレッド・ラッセル・ウォレス、（芸術家としての方がはるかに有名な社会主義者）ウィリアム・モリスなど6名<sup>4)</sup>が講義することとなった（Foxwell [1886a] [1886b] 序文（James Oliphant））。その6名の講義録が1886年に公刊された『労働階級の権利』である。その後、フォックスウェルの単独論文のリプリントが価格2ペンス版（80ページ）と価格6ペンス版（96ページ）それぞれ別個に発行された（JMK vol. X p. 293）。

6ペンス版のリプリント（2ペンス版の方は未見）は、本文（90ページ）は『労働階級の権利』と同一であるが、『労働階級の権利』の序文（2ページ）が再録されたほか、新たにフォックスウェルの序文（1ページ）と、『労働階級の権利』では未掲載であった図が別紙1枚に「価格変動の分析」

---

\* 京都大学大学院経済学研究科 教授

というタイトルで収録されている（本稿の末尾に掲載。なお、図を収録したため、リプリント版では『労働階級の権利』205ページの注が削除されている）。本稿では、パラグラフの末尾および原典ページの変わり目に、かっこ内の2つの数字でページ数を示すが、前の数字が『労働階級の権利』（Foxwell [1886a]）、後の数字が6ペンス版のリプリント（Foxwell [1886b]）のページ数である。

「雇用の不規則性と価格変動」は次の5節からなる（原典には序論の表記も節を示す数字もない）。

#### 序論

「雇用の不規則性による害悪」

「価格変動の分析」

「価格変動の対策」

「組織化と公表」

本稿も、その順序で紹介する。

II 雇用の不規則性による害悪

III 価格変動の分析

IV 価格変動の対策

(1) 一般的価格変動

(1a) 価値標準 (1b) 信用循環

(2) 市場取引・投機による価格変動

(3) 個別商品の価格変動

(3a) 生産要因による価格変動 (3b) 消費要因による価格変動

V フォックスウェルの改革案：組織化と情報の公表

VI おわりに：要約とフォックスウェルの結語

本論に入る前に、フォックスウェルの基本的考えを記しておこう（なお、本稿の小見出しは筆者による）。

（雇用の不確実性が最重要問題である理由） 雇用の不確実性が「社会進歩と労働階級の友」の最重要の注意を要求するのは、大衆の状態がきわめて不安定で、産業の状態がきわめて不穏である一方、社会改革は漸進的かつ緩慢でなければならず、適切な救済策が考案され実行されるよりも前に状況が変わるといふ事情が存在するからである（186,7）。

（包括的見地で分析すべきであること） 経済的議論においては詳細な事実によって原理が曇り、〈木を見て森を見ず〉ということがしばしば起こる。このことは雇用の不確実性と密接に関連する不況の性質と原因に関する議論にとくに当てはまるので、「包括的見地」から問題を扱うメリットはきわめて大きい。皮相的という逆の危険もあるけれど、細部の検討は聴衆者自身にまかせて、「第一原理」を語り、時間の許す限り、基本的かつ体系的見方を提示する（187,8）。

## II 雇用の不規則性による害悪

フォックスウェルによれば、雇用の不規則性による主要な害悪に取り組み、その根本原因である価格変動を緩和しようとする者は、偏見および相反する利害によって強い妨害を受ける。それゆえ、「当然の用心として」、原因を端折らずに述べることにする（189,10）。

（問題は変化そのものではないこと） フォックスウェルは〈変化をなくそうとは誰も思わない〉

といい、変化そのものは肯定する。「リズムは宇宙の最も基本的法則の1つであると思う。進歩とあらゆる種類の運動は、波動、鼓動、循環によって生じるのであり、均一な形では生じない」。産業についても同様であり、攪乱から疑いようもない利益を得ている。フォックスウェルは、テニソンの詩のアーサー王の言葉を引用する。「変化は発明と活力を刺激し、停滞を回避する。

『古き秩序は変化して新しい秩序に道を譲る。

良き慣行が後の世を腐敗させぬよう』<sup>5)</sup>」(189,10)。

フォックスウェルは、そよ風と嵐に例えて、「有害なのは、変化そのものではなく、変化が不連続なことや、変化が激しいことである」という(189,10)。人が関わり、個人間の関係ができ、モラルの力が作用するには、ある程度、諸条件が永続的でなければならない。利他的感情と社会的感情は、社会組織の接合剤であり、産業的摩擦の緩衝剤であるが、それらの発展には時間が必要である。また、象徴的な組織に体化されていなければ十分に力を発揮できない。

こうしたことはすべての階級に等しく当てはまる。けれども、急激な変化は、弱い階級にとりわけ有害である。彼らは変化の影響を十分に予想できず、うまく対処できない。それゆえ、そうした階級がどの時代でも結束して慣行に保護を求めるのは確かな本能である(190,11)。弱い階級にとって、「慣行、あるいは定型的な競争」は絶え間ない変動よりもましかもしれない。変動は新たな交渉を伴い、弱い立場は必然的に不利益をもたらすからである(190-91,11-2)。

(リカードウ派批判) フォックスウェルは、調整に必要な時間を軽視しているとしてリカードウ派を批判する。すなわち、彼らは産業よりも貨幣市場に馴染みがあるので、弱い階級が突然の変化に対応する上で直面する諸困難を著しく過小評価している。彼らは産業の攪乱をバケツの水が投げ入れられて広がる水紋のように変化が均等に、そして直ぐにも生じると考えている。けれども、産業は、いってみれば〈粘りのある氷河〉のようなもので、多大な緊張の下、多くの破碎や内部構造の攪乱を伴って緩慢にしか変化できない。「自由貿易の無血勝利」と述べられるものは、しばしば苦しむ人たちを後に残してきたのである(192,12)。フォックスウェルは、ジェームズ・ステュアートの「埃をあげることなしには部屋を掃除できない」<sup>6)</sup>という言葉を用いて、掃除は掃くべき埃よりも多くの埃を作り出すといい、機械の導入による価格低下は、職人に対する多大な害と不正を代償として実現されたものであると述べる。さらに、この問題についてウィリアム・ベティは百年も前に人としての普通感覚を述べているといい、「失業(non-employment)によって千人の労働者の労働能力を失わせるよりは、しばらくの間、千人の労働者の生産物を燃やしてしまう方が良い」<sup>7)</sup>という言葉を用いている(192,13)。

(労働者の実際の状況) 転職のムダと損失だけが現代産業の不安状態の唯一の結果ではない。転職しない人についても、雇用は大変不安定で不規則であり、実際の稼得はきわめて低い(192,13)。フォックスウェルはゲーツヘッド教区司祭(Rector of Gateshead)ムーア・エディ<sup>8)</sup>の1885年5月3日ケンブリッジ大学における説教と、フォックスウェルの弟アーサー・フォックスウェル<sup>9)</sup>の分析を紹介している。

ムーア・エディは、〈まじめな労働者は、名目的には週当たり20シリングから22シリング稼ぐが、実際には平均すると8シリングから9シリングしか受け取っていない。ロンドンの港湾労働者は、雇われている時に週当たり2ポンド稼ぐが、しばしば6週間あるいはそれ以上働けないことが

ある。彼らは薄汚れた生活を送っており、常雇いならば喜んで1ポンド返上する」と述べている(192-93,13-4)。

アーサー・フォックスウェルが調べたマンチェスターの273の事例によると、種々の職業で名目賃金が週当たり14シリングから35シリングと幅がある中で最高の平均稼得は、会社に雇われている常勤の労働者の名目賃金20シリングである。12人の指物師は名目的には週当たり26シリング9ペンスを受け取るが、実際の稼得額は平均すると13シリングにしかならなかった。4人の石工は名目的には35シリング受け取るが、実際には平均10シリングであった(193,14)。

フォックスウェルは、これらの事例は例外的で、一般的雇用条件に関して誇張された印象を与えるものであり、より広い領域で平均的な推計をすべきであるという意見は当然ありうるという、〈その点に関しては誰も自信を持って言うことはできない〉、〈公的な統計もない<sup>10)</sup>〉(193-94,14-5)という。また、〈雇用変動の問題は、平均的議論が適用できず、誤解に導きやすい問題である〉(194,15)と述べる。

(非自発的失業) 詳細な分析はないものの、フォックスウェルは非自発的失業について注意を促している。「その他に注意すべききわめて重要な問題がある。この強いられた遊休forced idleness——あるいは『遊んでいる playing<sup>11)</sup>』、いくぶん皮肉を込めてそのように呼ばれる——は、たとえ平均して均等に分布するとしてさえも十分悪い。そして実際には、失業は均等に分布しない。通常は、弱い労働者あるいは効率の劣る労働者に最も厳しく振りかかる。そして『周辺の失業者』(fringe of unemployed)が生み出され、惨めさから、どんな条件でも仕事を求める競争を強いられている。産業界は、この種の競争を回避するために多大な努力を傾注している。けれども、周辺の失業者が存在する限り、賃金は一般に押し下げられ、雇用条件は悪化する。賃金、雇用条件の両方で産業全体が害され、ようやく獲得した快適な立場は失われるかもしれない」(194,15)。

(所得の安定か所得の大きさか) 現代の産業進歩をバラ色に描く人々は雇用対賃金の問題を十分に考えていない(195,16)。フォックスウェルは、この問題に関する労働者階級の一般の見解が何であるかを述べることはできないけれども、「私自身の考えは、ある必要限度に到達したならば、所得の大きさよりも所得の安定の方がはるかに重要である、というものである」と述べる。雇用が不安定なところでは、節儉と自持は阻害される。長年の貯えも数ヶ月で使い果たされる可能性がある。宿命論的精神が増大する。あらゆるものが不確実で失うものがないところでは、結果を考えない人口過剰が確実に始まる。実業界も、産業変動によって同様に意気消沈し、注意深く予測してもそれに見合う収益をあてにできず、純粹にギャンブルである投機が促される。けれども、最も被害を被るのは労働階級である。この階級には節儉と慎重とが絶対に重要である。攪乱期に快適水準の著しい低下と対応する社会的ポジションの喪失が生じるのである(196,17)。

(歴史研究の重要性) フォックスウェルは、産業変動によって生じる害悪という社会問題の実際の解決のためには、どれほど精妙になされようが、「アприオリな推論」よりも「歴史の幅広い見地」の方が「より確実な基礎」を与えると述べる(197,18)。「1760-1850年の惨憺たる章が書かれるようになった時、少なくとも1つのことが明らかになるだろう。すなわち、この期間は、産業の無政府時代であるが、プロレタリアートの成長期でもあった。プロレタリアートという名称で呼ばれる餓死しそうな貧民が大量に現代的労働市場の不確実性から生み出されたのである。雇用を確保できる者の賃金を引き上げたのと同じ産業変化が、大半の者の状態を不安定にし、生活の見込みを定まらないものにした。富が急速に増大した一方、人口と貧困もほぼ同じペースで増大した」

(197,18)。

フォックスウェルは、ビュレ『イギリスとフランスにおける労働者階級の貧困』<sup>12)</sup>、ギッフェンの統計協会会長就任講演(1883年11月20日, Giffen [1883])、イーデン『貧困の状態』<sup>13)</sup>を引用して、貧困が産業の発展とともに増大したことは明らかであると述べる(198-99,19-20)。また、雇用の不規則性が社会的辛酸・不平、そうした感情から生じる犯罪・暴力の主たる原因であるといい、プリント『イギリス犯罪史』<sup>14)</sup>を引用する。〈不況期において一般犯罪は、イングランドの平均では24パーセント増であるのに対して工業地域では51パーセント増である。強盗事件は平均では50パーセント増であるのに対して工業地域では103パーセント増である〉(200,21)。革命的騒乱との関係も明白である(200-1,21-2)。

(2人の権威) 雇用の不規則性が問題であり、その原因を除去すべきであることに関して疑問はありえない。実際、小規模農業者について、追い立ては犯罪であり、地主が地代を獲得できるかどうかに関わらず、借地権は保証されねばならないという主張もある。それでは、なぜ職人は競争という奇禍にさらされ続けねばならないのか？ フォックスウェルは、産業不安定性を軽減することの重要性を評価し過ぎることはできないと確信しても、そう確信する理由を不完全にしか説明できていないと感じているといい、2人の権威の助けを借りて議論を補強しようと思う、と述べる(201,22)。

(ケトラー司教) 最初の人物は著名なカトリック社会主義者、マイントの司教ケトラー<sup>15)</sup>である。「労働人口の大半——すなわち、現代国家の大多数の成人男性のほとんど、およびその家族——その物的生存のすべて——本人、妻、子供のために必要なパンに関する日々の問題——が、あらゆる市場と商品価格の変動にさらされていることはもはや疑いえない。このこと以上に惨めなことを私は知らない。そうした貧しい人たち——家族とともに、日々、市場価格の気まぐれな変動のなすがままにある——彼らの心中にどのような感情が引き起こされるのか。これがわれわれの自由なヨーロッパの、奴隷市場である」(201-02, 22-3, Rae [1884] p. 233 [フォックスウェルは pp. 248,249 と記しているが、誤りと思われる]より引用)。

(ジョージ・ハウエル) もう1人の人物は、労働組合出身の庶民院議員(1885-95)ジョージ・ハウエル(George Howell 1833-1910)で、フォックスウェルは経済学者を批判している箇所を『資本と労働の抗争』から引用する(202,23)。「経済学が何らかの実際の価値を持つべきであるというのなら、経済学者は、しばしば生じるそうした変動を回避できる何らかの手段を発見し、その手段を試みるべきである。そうする代わりに経済学者は人々に対して、販売のためにオファーされる商品の価格に関して1日に50回も変動するような『市場』の変動に賃金は従わねばならないと主張し、変動を増大させる仕方を教えているだけである。株価や国債価格は、全音域を使った楽譜のように『上がったり下がったりする』。その奇妙な音楽は熟練の演奏者によって奏でられ、聞く者は実際、悲しい気持ちになる」(Howell [1878] p. 228)。

(ジェヴォンズ) ハウエルのこの箇所を初めて読んだ時、フォックスウェルは深く感銘したといい、「変動によって生じる害悪についても、ある面で変動を助長しているということで彼が経済学者全体を非難していることについても、ハウエルは正しいと感じた」と述べる一方で、「経済学者の多くはこの分野で良い仕事をしている。とりわけ1人の人物はそうである」とも述べている(202-3,23-4)。フォックスウェルが挙げるのは、価格変動の原因に関して一連の賞賛に値する研究を行った「同時代で最もブリリアントな経済学者」、ジェヴォンズである。フォックスウェルは、

〈以下で述べることは、ジェヴォンズの研究の結果を簡単な形で提示しようという試みにすぎない〉と述べ(203,24)、価格変動を議論する。

(価格変動) ここまで問題を「産業の安定性をいかにして増大させるか」(原文はイタリック)として提示してきたけれども、「価格変動をいかにして減少させるか」(原文はイタリック)という形に置き換えることができる。「なぜなら、現代のような競争社会では、必ずしもすべての価格変動が雇用の中断を導くわけではないが、雇用の中断の原因で価格変動によって表現されないものはないからである」。その理由は、〈われわれは産業に関して主として利己心で動き、商工業は雇用者によって制御され、雇用者の利害は市場価格の動きによって測定され、指示される〉<sup>16)</sup>からである。フォックスウェルは、マルサス『経済学原理』第6章から「商品の市場価格は、富の生産において社会のあらゆる大きな変動の直接原因である」(Malthus [1820] p. 342)という言葉を用い、大規模組織の登場の始まりという例外があるにしても、1820年に真であれば現代においてよりいっそう真であると述べる(203,24)。

(価格変動研究の意義) 「いいかえると、雇用の中断は、かなりの程度、価格から生じる攪乱によって直接的に引き起こされる。そうでない場合でも、その原因は価格の動きに反映され、そうした価格変動自体が新たな攪乱原因になる。それゆえ、価格の動きに関する包括的研究は産業変動の原因について全般的展望を与え、価格メカニズムから生じる諸原因と、産業組織と消費習慣に直接関連する諸原因とを区別するのに役立つ。そしてその両者の比率および相対的重要性に関して得られるより良い知識によって、必要な種々の救済策の立案に取り組むことが可能となる。それゆえ、雇用変動を除去しようとする者は、第一に、価格変動の諸原因を理解しなければならない」(204,25)。

最後に、フォックスウェルは、以下の分析は〈ハウエルほか多くの人々が深く心に抱いている目的に対するささやかな貢献である〉と述べる(204,25)。

### Ⅲ 価格変動の分析

フォックスウェルは、錫(以下スズと表記)、鉄、綿花の3つの商品価格および一般卸売物価の1870-1886年の時系列グラフおよび一般卸売物価の1782-1886年の時系列グラフ(本稿末尾の図参照)に基づいて議論する<sup>17)</sup>。

一般卸売物価は、貨幣用金属の数量に大変化が生じる(オーストラリアとカルフォルニアの金の発見)直前の1845-1850年の平均価格で総額100ポンドとなるように選択された典型的な卸売商品バスケットの金額であり、その商品バスケットをたとえば1789年に購入すると121ポンド、1809年では約224ポンド、1864年では151ポンド、1873年では142ポンド、1885年では92ポンド必要となる(206-7,27-8)。

スズ、鉄、綿花の3つの商品価格曲線を比較すれば、次の2つのことに気づく(209,30)。

- (a) 3つの商品価格曲線の一般的形状が互いに類似している。
- (b) 3つの商品価格曲線の一般的形状が同じ期間の一般卸売物価曲線に類似している。

比較のために選ぶ商品が何であれ、結果は同じであり、結果が同じということが理論においても実務においても最重要である。すなわち、「ある程度、すべての商品の価格は、互いに同調して変動し、一般物価水準の変動に対応して変動する。特定商品の変動がどれほど異なり、その原因がど

れほど違っていようが、共通の変動原因が存在する。それは一般物価水準の変動である。これがわれわれの第一の結果である」(210,31)。

そして1世紀間についての一般卸売物価曲線を見てわかることは、おおよそ10年ごとに生じる起伏が存在していることである。すなわち、信用循環が一般物価変動の主原因である。「それは、通例行き着くことになる恐慌によって事業世界ではよく知られている商業変動であり、『信用循環』として認識されてきたものである。なぜならそれは商業信用の拡張・縮小の結果だからである」(211,32)。

フォックスウェルは、〈ジェヴォンズの計算によると周期は約10.6年である〉と記している。しかし、価格曲線の波動は完全に同一ではない。間隔も不規則で、形状も同一ではない。フォックスウェルは、この不規則性の原因を「一般貨幣市場の変動」に由来するものと考え、さらに一般貨幣市場の変動の原因を、(1) 貨幣市場自体における投機と(2) 貨幣市場に及ぼす大卸売市場における変動の影響とに大別する(211,32)。

フォックスウェルは、こうした「一般貨幣市場の振動」を一般卸売物価曲線の2次的要因と位置づけるのではなく、一般卸売物価曲線のもう一つの特徴である「一般卸売物価曲線の大隆起」に注目する。すなわち、物価は、1785年から1810年まで上昇し、1810年から1850年まで低下している。そして1850年から1873年まで上昇し、1873年以降、再び低下し、1850年水準まで下がっている。つまり、「信用循環の振動と一般市場の振動」は、水平の物価線をめぐって生じるのではなく、物価の基準線あるいは標準線ともいべきものをめぐって生じる。基準線あるいは標準線は、ある時は右上がりであり、他の時には右下がりであり、物価変動は、かなり長期間、同じ方向で続く。「そうした価格の基礎的変動は、貨幣用金属の需要あるいは供給の変化によって生じる」(211,32)。

このように一般物価の変動は単一の原因による変動としてではなく、それぞれ異なる原因に基づく3つの変動

- (1) 価値標準の変更にに基づく物価変動
- (2) 信用循環に基づく物価変動
- (3) 市場が原因の価格変動

から構成される複合変動として把握されている(210,31)。

フォックスウェルは(1)と(2)の変動を「通貨変動または一般物価変動」とひとまとめにする。(3)の変動は、取引活動(dealing)と投機に基づいている。一般貨幣市場に関連する場合、一般物価変動となるが、特定商品の価格変動に限定される場合もある。どちらも作用様式は類似し、またしばしば密接に関連するので、独立に、「市場が原因の価格変動」とする(215,36)。

特定の商品価格の時系列グラフに目を向けるならば、各商品には、それぞれ固有の変動があることがわかる。特定の商品価格曲線の異質性は、(a)各商品市場の取引の仕方(b)各商品の需要と供給に及ぼす固有条件、すなわち、自然要因、発見、発明等による生産の変化、あるいは、流行、代替品の導入、新市場の開放等による消費の変化による(213,34)。

たとえばスズ<sup>18)</sup>の商品価格曲線の場合(本稿末尾の図の右側上から2番目のグラフ)、1872年の価格高騰とその後の急激な価格低下は、一般物価の対応する動きに部分的には原因がある。けれども、それらの動きは「リング ring<sup>19)</sup>」の行動によって大きく増幅されている。このリングはコーンウォールのスズ鉱山の株で投機を行っていた金融家集団で、スズの1トン当たりの価格を165ポンドにつり上げた(214,35)。

1877年以降、スズの価格は、銑鉄や綿花の価格のように一般物価の低下に同調して変動するということがなかった。1880年の一般物価の若干の上昇は、信用循環に基づくが、スズの場合には相当の上昇となり、その後の低下は遅れ、小さくなった。その理由は、スズの生産において収穫逓減法則が大きく作用したためである。世界の富と人口の増大によって必要となった増加分は逓増する費用でしか供給されないのである(214,35)。

かくしてフォックスウェルは、価格変動の諸原因を3つのグループおよび「6つの変化要因」に分類する。

- (1) 通貨変動あるいは一般物価変動
  - (1a) 価値標準の変動
  - (1b) 信用循環
- (2) 市場が原因の価格変動(取引活動と投機)
  - (2a) 一般貨幣市場
  - (2b) 個別商品市場
- (3) 個別商品固有の原因による価格変動
  - (3a) 生産あるいは供給
    - ① 収穫逓減または収穫逓増
    - ② 発明および発見の影響
    - ③ 漁獲および農産物収穫
  - (3b) 消費あるいは需要
    - ① 社会の進歩率の変動
    - ② 代替的生産物、新市場、流行、嗜好、不買運動等の影響

フォックスウェルはこの節を次のように締めくくっている。「ここにいる皆さんの多くは、こうした価格変動を緩和し無害な範囲に限定したいと考えている、と私は思っています。皆さんの目の前にあるチャートに描かれている激しい価格変動は、投機家連中がゲームにするには都合が良いものであることは疑いようもありません。けれども、現在の高度に文明化した時代には、ギャンブルしたい人には特別に用意された数多くのものが存在するのであり、産業をサイコロにする理由はまったくありません。人が自分の富を賭けることに誰も反対しませんが、他人の運命をもてあそぶ必要はないのであります」(216,37)。

#### Ⅳ 価格変動の対策

##### [1a: 価値標準]

実践的改革案を考え導入時期を判断するのは研究者よりは実務家の仕事であるが、「問題の理屈は十分明らか」なので(216,37)、価格変動の対策を「6つの変化要因」に従って簡潔に論じる。とくに「貨幣価値の変化」を重視する。なぜなら、その重要性は一般に認識されておらず、理解が足りないと思うからである(217,38)。

(物価低下の原因) 「原因については、ゴッシェン氏<sup>20)</sup>と同じく、全問題は『簡単である』



ように思われる」(217-8,38-9)。ゴッシェンは次のように述べる。「われわれは金生産の大幅な縮小に直面している。最重要諸国における銀廃貨によって金に対する強大な圧力がある。それゆえ、物価が金と商品の相対的数量で決まるのであれば、金と商品の比率に対する攪乱は物価に影響するに違いない。一方で、金生産の縮小があり、他方で、商品生産の増大がある。それゆえ、経済科学が2つの要因が生み出すに相違ないと教える、物価の低下がある」(Goschen [1885] p. 204)。

フォックスウェルは次のように述べる。「(貨幣の流通速度が同一のままであるとすると) 貨幣の価値は、貨幣用途に利用できる金属の量と、貨幣に現金化されることを求める取引の量との関係に依存する」(218,39)。人口および産業が増大するにつれて、貨幣需要が増大し、貨幣価値が増大する傾向がある。他方、信用の導入によって金の使用を節約できるならば、貨幣価値は低下する傾向がある。フォックスウェルによれば、この2つの傾向は19世紀の1世紀間、両者ともに作用した。1850年以降、両者の作用はほぼ同程度であった。にもかかわらず、1850年から1873年まで貨幣価値は低下し、1873年以降現在まで貨幣価値は増大している。フォックスウェルは、その原因の一部を金の供給低下に見出す。「オーストラリアの金の発見の影響は消失しつつある<sup>21)</sup>」(218,39)。しかし、貨幣用金属には銀もあり、銀の供給は金の供給が減少した分だけ増大している。それゆえ、金銀が貨幣として無差別に利用されていたならば物価変化はほとんどなかったはずである。けれども、1871年のドイツ政府の「不幸で無知な行動」(219,40)すなわち銀本位制から金本位制への変換が、1873年の事実上の銀廃貨に至る連鎖反応を引き起こし、既に収縮していた金供給に対して金需要の膨大な増加をもたらした。フォックスウェルは、ドイツの行動が惹起したドイツ、イタリア、アメリカ3カ国の金需要増加に関して、過大といわれているゴッシェンの推計2億ポンドのほかに、『エコノミスト』の推計1億4000万ポンドに言及して、この低い方の数字だけでも物価低下を説明するのに十分であるとしている(219,40)。

(信用について) 銀行制度が高度に発展した現代社会では、信用の変動がもたらす攪乱的影響が存在するため、貨幣と物価の関係は確証が困難である(220,41)。しかし、それにもかかわらず、その関係は信用が存在しない単純な場合と同じように存在する(220-1,41-2)。その理由は、「貨幣的金属は、総流通の小さなパーセンテージであるとしても、残りの部分に対して支配的影響力を持つからである」(221,42)。

(過剰生産論について) ゴッシェンは、〈金の価値が増加したことを否定する人は低価格を過剰生産のせいにする〉と指摘しているが(Goschen [1885] p. 205)、フォックスウェルも次のように述べている。すなわち、論争中の問題が通貨に関するものである場合には、〈事実を考えあわせて推論する、ということをしよとしない人〉が常に存在する。そうした人は、1809年、不換紙幣である銀行券が過剰発行されて5ポンド紙幣が金で4ポンド7シリングの価値しかなかった時、紙幣の価値が低下したのではなく、金の価値が増大したと主張した。そして現在われわれは、価格低下は金が稀少であるからではなく過剰生産によるのである、という主張を聞かされる。けれども、価格低下に対する救済策についていわねばならないほとんどすべてのことは、〈過剰生産論は誤りである〉ということが前提になる。しかし、フォックスウェルは、過剰生産論には立ち入らず、他の見解を簡潔に論評する(221,42)。

(価格水準無差別論について) 価格の高低は産業にとってどうでもよいという見解について。確かに抽象的理論では物価が高いか低いかは問題にならない。けれども、現実には価格水準は永続的に一定ではなく、絶えず変動している。実際の目的のためには貨幣量の変動はきわめて重要であ

る (222,43)。

貨幣価値変化がもたらす害悪の例としてフォックスウェルは、1793年のフランス、1776年以前のアメリカ植民地を挙げる。しかし、そうした攪乱は通常、恣意的な紙幣発行の結果であり、幸いにも、貨幣用金属のストックはきわめて大きいので、年々の供給量の変動がその種の攪乱を引き起こすことはない (223,44)。「けれども、そうした変化は通常、累積的 cumulative である」。貨幣価値の変化は一方向に長期間持続する。週ごとの変化はわずかでも年々の量は大きな値になる。「すべての販売が現金でなされ、すべての契約が日々改訂されるのであれば、そうした貨幣価値の変化は問題ではないが、瞬時的契約は不可能といわないまでも実際的でない。いかなる社会もそのような条件では存在できない。商取引の大半はなんらかの種類の延べ払いに基づいているのである。それゆえ、貨幣価値の漸進的变化でさえも精妙な経済関係に大混乱を引き起こし得ることは明らかである。いずれにせよ、そのような変化はすべてまったく不正 unjust である」(224,45)。

(債権者債務者関係) フォックスウェルによれば、貨幣価値の変化が引き起こす債権者債務者間の公平性の問題は、最も初期の経済学的文献においても論じられていた。けれども、その問題に対しては何もなされていない。貨幣的契約の枠組み全体は、鉱山発見という幸運にすぎりついて、偶然のなすがままにある (225,46)。フォックスウェルは、1873年に142ポンド借りた人を例に取る (224-225,45-6)。現在の92ポンドは1873年の142ポンドが買ったであろうものを買うことができるのに、債務者は142ポンド返済しなければならないから、50パーセント以上も債務が増加したことになる<sup>22)</sup>。フォックスウェルは、「富の分配におけるそのような恣意的革命を許す制度が合理的か、あるいは我慢できるか」と問い、「最高度に野蛮で、文明的ではない」と述べる (225,46)。また、人の予見能力は限られているから、貨幣価値の変動を事後的に調整する余地を契約に含めることが考えられる。しかし、賃金交渉におけるトラブルを見れば明らかのように、そうした調整を実際に公正に行うのは困難である (226,47)。

(物価上昇か物価下落か) かくして公平性のみならず便宜の点からも、〈価値標準の均一性を目指すべきである〉という結論となることは疑い得ない。けれども、そのような価値標準の均一性を実現できず、物価が上昇するかまたは下落するしかないとした場合、公共的視点からは、そのどちらが望ましいのか？

フォックスウェルは物価上昇を支持する。すなわち、いずれの方向でも公衆は損失を被る傾向がある。他方、商人は公衆を犠牲にして利益を得ることは確実である。商人は、物価が上昇する時、上昇額を誇張して小売価格を必要以上に引き上げる (226,47)。物価が低下する時には、できるだけ値下げを遅らせる。商人に比べて公衆は常に弱者の立場にあり、価格がどちらに動いても損失を被るが、価格が低下する時、公衆の損失は最大となる。「物価が低下する時、債権者は債務者の犠牲で利得を得る。すなわち、退職者と非活動階級は、活動階級と健常者を犠牲にして利得を得る。資本の所有者は資本の利用者を犠牲にして利得を得る」(227,48)。

(物価低下が労働者階級に及ぼす影響) フォックスウェルは〈賃金は相対的に固定的支払いであるから、労働者階級は物価低下で利得を得るであろう〉という見解を論評し、失業の可能性を指摘して、この見解を否定する。すなわち、物価上昇に賃金上昇が遅れるのと同じように、賃金低下は物価低下と同時に生じないから、「雇用が攪乱されないのであれば」、労働者階級そして俸給受領者階級さえも、物価低下によって利得を得るであろう。けれども、「物価低下は商工業を減退させる」(227,48)。

(企業家論) ラヴィントンは〈景気は企業家の景気見通しにおける確信に左右される〉と述べたが (Lavington [1922] p. 27), フォックスウェルは「産業の拡張あるいは縮小 (expansion or depression) は雇用者が形成する景気見通しに依存する」といい、2つの価格 (生産物価格と生産要素価格) 間で取引する商人というラヴィントンの企業家像を彷彿させる議論を展開する<sup>23)</sup>。「物価低下は種々の仕方で雇用者を害する。雇用者は、借入金, 地代, あるいは租税など固定的支払いをせざるを得ない人として損失を被る。原材料の購入者として損失を被る。原材料の価値は製造過程中に低下するからである。完成財ストックの保有者として損失を被る。完成財の価値は保有している間, 日々減価するからである。賃金および俸給の支払者として損失を被る。切下げがきわめて困難だからである。そのうえ, 物価が低下する時, 雇用者の受取額は減少するのに, 支出の方はおおかた固定されているから, 雇用者は物価変化によって著しく損失を被るのである。それゆえ, 雇用者が生産を削減し, 需要を見越して生産する代わりに, 需要を待つというのも不思議ではない。けれども, それは深刻な雇用削減を意味するのである」(228,49)。

(雇用削減) 深刻というのは, 雇用削減をたとえば5パーセントとすると, 雇用されている全員一律に雇用が5パーセント減るのではなく, 雇用されている人の中の5パーセントの人たちが仕事から放り出されることを意味するからである。雇われている人たちの物価低下による利得は, おそらく失業した人を助けるのに大部分消えてしまうであろう (228,49)。「それだけでなく, 失業した人は常の購買力を奪われるので, 他の産業の生産物に対する需要が低下する」(228-29,49-50)。このように害悪が拡大し, 全般的不況が始まる<sup>24)</sup>。

(「不況また良し」論に対して) 物価低下は悪いことばかりではない。それが導く不況は経営者に反省する機会を与える。瑣末から原理に, 生産物の数量から製造過程に, 注意が振り向けられる。必要は発明の母となる。利潤の減少は真剣な節約に向かわせる。投機は著しく抑制される。不況を克服した産業はより強固になる。

けれどもフォックスウェルは, 〈これらはすべて本当のこととはいえ, 過大評価してはならない〉と次のようにいう。「疫病は良いものである。それは強者よりも病人に致命的であり, 生き延びた人々の平均的健康状態は高くなるからである, と主張するも同然だからである」。フォックスウェルは〈流れに抗して舟を漕ぐ人〉に例える。それは筋肉に良く, 注意も怠らないから, 良いことには違いないが, 多大かつ不必要な緊張を伴う。穏やかな水面よりも好む人はいないであろう (229,50)。

(最小限の対策) 以上, 貨幣価値の変化に対して何らかの対策が必要であることを提示した。次に, 対策を論じる。

フォックスウェルは先ず物価情報の公表を挙げる。「第一に, 現実の物価の動きがはっきり確かめられ, 広範囲に公表されるのであれば, 大いに役立つことであろう。物価が政府の行動と鉱山の産出に左右される限り, われわれは物価の動きをはっきりと予測できないであろう。しかし, 連続的かつ一定の物価下落というものがあって, たんに通常の10年周期の景気変動の不況にあるだけではないことが一般に認識されるならば, 社会に多大な利益があるだろう。そのときには, 実業家が抱く無益で根拠のない回復期待は払拭され, 事実と正面から向き合うこととなる」(230,51)。

物価変化を補償する調整がなされるかもしれない。賃金および俸給は物価スライド制によって調整されるかもしれない。譲渡抵当権, 生活扶助, 長期貸付, 地代, ロイヤルティ等も同様である。そのようにして物価低下が産業を沈滞させる傾向は大幅に緩和される。その場合, 調整の基礎とし

て物価指数が必要となるが、公衆が絶対的信頼をもって受け取れるように、公的あるいは半ば公的に確証されねばならない。別の目的には別の指数が必要になるだろう。それらは、正確に、そして多大な困難と膨大な出費を伴うことなく、提供されねばならない。これらは「最小限なされねばならないことである」(230,51)。

(フォックスウェルの基本的立場) フォックスウェルは「しかし、私には、その解決策はきわめて不十分かつ不満足であると思う」と述べる(231,52)。なぜなら、無数の調整が必要であり、その中には出費を伴うだけでなく摩擦を生じるものもある。簿記を大いに複雑にするであろう。たいていの商取引は繰り延べされるとしても短期であり、調整のしようがない。調整の必要がない方がはるかに良いことは明らかである。フォックスウェルの基本的立場は、〈明らかな救済策は、標準自体を補正するか、不変の標準を選択することである〉というものである(231,52)。「けれども、世論は緩慢にしか変化せず、世論が最も保守的になるのは通貨問題である」。フォックスウェルは、統一的な国際的価値標準の確立に関わる大障害が上手に克服されるには少なくとも1世代かかるといい、その間、産業は物価低下の弊害を辛抱しなければならないから、理想的システムを待つことなく何らかの実践的救済策が可能であるかどうかを検討する(232,53)。

(複本位制の再建案) 「その種のいくつかの方策は現在公衆に提示されている。それらすべての目的は、金に対する圧力を緩和することによって物価低下を阻止することにある」。そもそも物価低下をもたらしたのは複本位制の崩壊である。その再建が物価を引き上げることは疑いようもない。フォックスウェルは、〈物価上昇は一時的である〉というギッフェンの指摘を念頭に置きつつ、〈私には、複本位制の復活によって物価は永続的に維持されると思われる〉、〈複本位制は貨幣を節約し、究極的には国際貨幣となり、地金支払いの必要を緩和する〉と述べる。けれども、それ以上論じることはせず、「全問題の卓越する明確な説明」としてニコルソン『銀問題』(J. S. Nicholson, *The Silver Question*, 1886)を挙げ、その一般的結論には全面的に賛同するとだけ述べている(232,53)。

(1ポンド紙幣の発行案) 金本位制が確立した1816年以降、イギリスの世論は複本位制に対して敵対的であり、現時点においても複本位制の再建には多大の困難がある。そこでフォックスウェルは、イングランドにおける1ポンド紙幣の発行を検討する。この案は、金に対する圧力を弱めるだけでなく、金属流通を紙幣流通に置き換える傾向を有する。それゆえ、通貨改革の更なるステップを著しく容易にする。しかし、最終案とみなすならば〈不十分〉といわねばならない。この種の手段では根本的解決は実現不可能である(233,54)。

#### [1b: 信用循環]

(信用循環の原因) フォックスウェルは、信用循環の原因を現代的産業の特徴である高度の組織形態に見出す。すなわち、信用循環は、きわめて精妙な分業とその結果である産業間の複雑な相互依存関係によって生じた一般的に変動しやすい傾向すなわち一般的過敏性と、高度に発展した信用制度の利用に原因がある(234,54)。

(信用の利用) 狭小の金の基礎の上に信用の巨大な構造物が構築されている。金での支払い義務の13分の1が突如支払いを求めるならば、金融恐慌が生じる(234,55)。しかし、逆ピラミッドの信用システム<sup>25)</sup>は必ずしも不健全ではない。フォックスウェルは、信用を鉄道旅行に例え、運営が良好ならば事故の恐れはなくきわめて安全であるという<sup>26)</sup>。「われわれの信用システムは、それが前提する条件が良好である限り、十分安全である。けれども、そうした諸条件の変化に対して

は必然的にきわめて傷つきやすい」(235,56)。

(現代産業の過敏性) この過敏性は産業にも存在する。現代産業の一般的過敏性は、分業によるものであり、「高度の産業組織の利点に対して支払わねばならない避け難い代償」である。しかし、誤方向無計画の産業発展、良からぬ銀行行動に育まれた激しい投機、これらのものがないならば、現代産業の一般的過敏性があっても、現実の攪乱は無害な範囲に留まることができるであろう。前者は産業不況を招き、後者は金融恐慌を招く(235,56)。

株式会社は、その両方の種類の攪乱に関連があるように思う。しばしば観察されるように、無謀な競争、無責任な経営、非効率な経営を導く(235,56)。

(信用循環に対する対策) 銀行は、景気状態に関して広範な情報を持ち、資本の動きを制御するという点で、この問題において中心的位置に立つ。銀行は1878年の不況において金融恐慌を回避するのに貢献したが、健全かつ慎重な銀行業務のためには、なお改善の余地がある。実手形と空手形との明確な区別、より強力な準備、より弾力的な紙幣発行。けれども、既に大きな進展があり、イギリスでもアメリカでも新たな改善を期待できる(236,57)。

産業の状態および消費者の状況に関する情報の改善によって多くが期待できる(236,56)。巨大かつ急速な利得獲得を狙うのではなく節約を研究するのが賢明である。より短期の信用の利用、少額の証拠金による投機の抑制、株式会社に関する法律改正たとえば実際の払込資本金や借入資本金に関してより情報を開示することなどが望まれる。プロフィット・シェアリング<sup>27)</sup>が導入されるならばムダや横領は少なくなる(237,58)。公共事業やあらゆる種類の永続的改善は、できるだけ物価の低い時期に実施できるようにするべきである。鉄道会社はある程度この原則に従っているといわれている。また、固定価格で長期契約を締結する仕方に何かできることがあるかもしれない(237,58)。

(対策の根本原則) 改革のための原則は、価値標準の変動の場合と同じである。「われわれは、できる限り、変動を緩和しなければならない。それが避けられない限り、その大きさを確かめて公表し、その影響を緩和しなければならない」(237,57)。

## [(2) 市場が原因の価格変動]

フォックスウェルは、市場に関する2つの見解——アダム・スミスと社会主義者——そのどちらの見解にも全面的には賛同しない、と述べる。

(社会主義者に対して) フォックスウェルは、〈社会主義者は、パリ証券取引所を資本主義社会の代表、詐欺的投機家をパリ証券取引所の代表とする傾向が著しい〉というジョン・レーの見解<sup>28)</sup>に賛同しつつ、投機を議論する。地域的市場ではギャンブルまがいの無責任な投機が盛んである。しかし、投機が公衆を害する力は一般に過大評価されている。証券取引所についてさえそうである。価格を平準化するような投機が大多数であり、意図的に価格を攪乱させる試みは多くの市場取引においては例外である(239,60)。フォックスウェルは、〈1日で1人のブローカーが価格を1/8も変えることなくコンソルを30万ポンド売ることができる〉という事例を挙げ、このことは投機の助けがなかったならば成し得ないことであるが、他方では、この種の巨大市場(powerful markets)によってあらゆる資産の価値が絶えず正確に評価されることは、社会にとって大変有益である、と指摘する。フォックスウェルは、この評価の正確さは売値と買値の差によって検証できるといい、卸売市場(その差はしばしば1/4あるいは1/8パーセント)と絵画や古書、家具市場との相違を指

摘する。巨大市場、良好に組織された市場は、商業取引の確実性と計算可能性を大きく増大させ、資本の流動性、産業の伸縮性を増加させ、疑いなく、価格変動を狭い範囲に留める傾向がある(240,61)。

(アダム・スミスに対して) フォックスウェルは、アダム・スミスの〈人は自分の利害に常に従う〉という暗黙の仮定はしばしば大きな間違いを犯すといい、〈人は無知、慣行、成り上がるための無謀さに左右されがちである〉と述べる(240,61)。実業家は、柵の隙間を探して走り回る羊の群れのように、もっともらしい投資話に群がる。日々のルーティン以外では、あるいは、新奇な事態に直面する場合には、実業家も一般人と同様、詐欺や錯誤の犠牲になりがちであり、価格が攪乱される。日々の商いのマージンの薄さや事業における過酷な生存競争から、よく練られた詐欺の類や詐欺まがいの無謀な投機に嵌る者も出てくる。そうした試みは、価格を平準化することによってではなく、価格の攪乱を生み出すことによって利益を得ようとするものであり、しばしば瓦解に終わるとはいえ、一般に公衆に害を与える(241,62)。

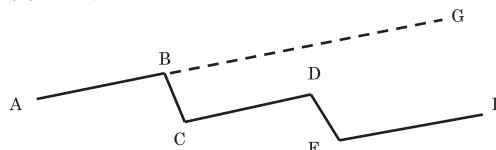
(投機対策) 實際上、犯罪的投機と有益な投機を識別することは不可能である。けれども間接的に、そうした投機をきわめて困難にする多くのことがある。たとえば、あらゆる事業報告に物的事実をすべて公表させ保証させることを義務付ける。そうすれば事実を偽ったり隠したりした場合に詐欺を告発できる。そしてすべての市場取引を数量についても価格についても公表させる<sup>29)</sup>(242,63)。さらに、市場を組織化して、そこでの取引は、当事者が作り商務院が認めたルールに従わねばならないものとする。そのような改革がなされるならば、市場取引が産業の大きな攪乱を引き起こすことはなくなる。投機が増加するかもしれないが、通常の投機は価格を攪乱するよりは平準化することが多いであろう。それゆえ、市場取引が価格に及ぼす影響に関する限り、価格の変動は小さくなると予想される。価格が安定する傾向は、市場の大きさ、資本量、取引者の知性そして市場取引の公開の程度とともに増大するであろう(243,64)。

### [3a 生産要因による価格変動]

富および人口が全般的に増大する状況において商品の需要は増大する。その場合、生産が収穫逓減法則に影響されるならば、その商品の価格は上昇する。他方、収穫逓増法則に影響されるならば商品価格は下落する。こうした2つの法則が程度の違いがあれ各商品の生産に作用する。ある場合には、製造の困難は小さく、原材料の希少性が支配的要因ということがある。また別な場合には、原材料は事実上無尽蔵で、製造の容易さが支配的要因ということがある。前者の場合、収穫逓減が勝り、他の商品に比べて価格が上がる。後者の場合、収穫逓増が勝り、価格が低下する(244,65)。

フォックスウェルは価格の動きを図1のように例解する。右上がりの線分ABGは、収穫逓減法

#### (a) 生産

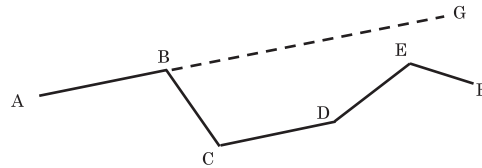


A—G. 収穫逓減 B. 新たな源泉の発見 D. 発明

図1

則が支配する商品たとえば肉の価格の傾向線である。点Bにおいて、オーストラリアとアメリカの肉が缶詰の形で利用可能になったとすると<sup>30)</sup>、肉の価格は低下する。価格はABG上を動くのではなく、点Bから右下がりのBC上を進む。けれども、点Cにおいて、再び収穫逓減法則が作用し、価格は右上がりのCD上を進む。点Dにおいて、発明の進展により、国内産の肉と同等の品質と新鮮さで冷凍肉<sup>31)</sup>を輸入できるようになったとすると、肉の価格は低下し、右下がりのDE上を進む。点Eにおいて、再び収穫逓減法則が作用し始めると、右上がりのEF上を進む。かくして、発見・発明の影響が合わさって、それらがなかったならば点Gに至る価格上昇傾向が中断され、価格は、実際には、出発点Aよりも低い価格Fとなるのである(245,66)。

(b) 消費



A-G. 需要増大 (人口, 富)    B. 代替生産物  
D. 新市場    E. 流行の変化

図2

[3b 消費要因による価格変動]

同様のグラフ(図2)で、フォックスウェルは消費条件の変化についてウールを例に説明する(245-46,66-7)。供給条件には変化がないものとする。人口増加に伴い、ブラッドフォード(Bradford, イングランド北部の都市)のウール製品の価格が上昇し、右上がりの価格線ABG上を進むものとする。ところが点Bにおいて、代替品たとえばフランス産のカシミアが輸入されると、価格が低下し、点Bから右下がりのBC上を進む。けれども、点Cにおいて再び人口増加の効果が現れ、右上がりのCD上を進む。点Dにおいて新市場が発見されると、価格がさらに上昇し、点Eに至る。点Eにおいて流行の変化が生じ、ウール製品の需要が著しく低下したとすると、価格は点Fとなる。点Fは出発点Aよりも低い価格となるかもしれない。

「突如生じる発明の進展」, 「予期しない発見」, 「説明できない流行変化」が常に存在するので、需要要因の変化による価格変化は扱いが大変難しい。「けれども、そうした必然的攪乱は、その影響を社会化, 分散化して、破壊的苛酷さが個人に集中しないようにすべきであると思う」(246-47,67-8)。農業収穫は昔も今も変わらない。けれども、野蛮な時代では、凶作の影響は過酷かつ局所的で、限られた地域で絶対的飢餓が生じた。文明化の影響によって、凶作の圧力は分散され、負担が容易になった。「これと同様なことが、ここでもなされねばならないように思う。自由貿易あるいは新発明の導入によって社会全体としては莫大な利益を獲得している時、1つの産業が消滅し、まじめな多くの人々が本人のせいでも予測もできなかった赤貧状態に陥るといような場合は、変化によって利得を得た公衆が変化によって破滅した犠牲者に対してなんらかの扶助をすべき明白な場合であると思う」。フォックスウェルによると、50年以上も前に、発明については、必要な資金は発明のロイヤルティで賄うことが示唆されていた。アダム・スミスは、大産業が攪乱されるところでは自由貿易は漸進的にしか導入すべきではないことを説いていた<sup>32)</sup>。どちらも現代産業の利

己的な個人主義と合致せず、どちらも採用されなかった(247,68)。

フォックスウェルは変化に対する即応についても疑問を投げかける。「嗜好や流行は常に変化するとはいえ、かくも突発的に大きく変化する理由はないように思う。消費者の根柢の無い気まぐれ一つ一つに安直で即時的な満足を与えることは、われわれの経済機構の唯一の目的ではないはずである」(247,68)。この点でフォックスウェルは、古いギルドは欠点もあるが、雇用の量および種類に関して急激な変化が生じるのをいくらか抑制したという利点もあった、と述べる。最後にフォックスウェルは、「需要変化の多くは、消費に関する統計の適切な収集、消費者の購買力の変動に関する細心の推計があったならば予測できたであろうものである」といい、ここでも、必要な情報そして理解が根本的に欠けていることを指摘する。「そうした害悪に対処するためには、破壊的競争をコントロールするための、理解ある人々による組織的産業行動<sup>33)</sup>と、そうした人々の指揮に役立つより良い情報とが必要であるように思われる」(248,69)。

## V フォックスウェルの改革案：組織化と情報の公表

産業変動の原因分析を通して2つの根本原理に到達した。「組織化」と「公表」である。この根本原理は、救済策全体の基礎、要約であり、一般的な改革案を提供するものである。社会的進化は常に連続的であり、提示する救済策も、ある程度実行に移されている。けれども、一般に、明言されて実施されているわけではない。またそれらは前世代の習慣や現在受容されている前世代の格率と著しく食い違う。それゆえ、改革案の特徴とその受容に対する偏見を論じる(249,70)。

### [1 競争の制御]

(個人主義批判) フォックスウェルによれば、社会は、秩序と正義に対する敬意に欠け、アナーキーでバラバラである。社会は、この1世紀の間、古い制約に抑制されず、心のない著述家一派(soul-less school of writers)がほとんど宗教といえるほど肯定した個人主義の急激な勃興によって苦しめられている(249,70)。「最も狭隘な利己主義が公共的徳として推奨され、恥知らずな私欲追求が行動動機のすべてとなっている」(249-50,70-1)。その結果、産業は未曾有の高圧力で稼働し、人口と富は増大した(他方で、膨大な浪費(人についても物についても)、苦痛、不衛生、商業道徳の墮落、粗悪品、混ぜ物等がある)。産業は、猛烈な競争の下で、方法においても結果においても大きく前進した。しかしながら、結局のところ、その時代の最大の成功は、無政府的な闘争によるのではない。その時代が歴史上顕著であるのは、物的生産物の急速な増大ではなく、自然科学(生物学を含む)における注目すべき多くの発見である。発見は、発見者に報酬を与えるけれども、報酬を目当てになされるものではない(250,71)。

(アンチ国家管理) 競争を国家などによる集権的管理に置き換えようというのではない。フォックスウェルによれば、国家管理を主張する者で、付随する害悪について主張するほど詳しく現代的産業の複雑さと利己心の圧倒的活力を研究した者はいない。「私企業を国家管理に置き換えることは、最も乱暴で性急な実験になるだろう。人間本性と現代国家の行動に関するわれわれの知識からすると、実験は破滅的失敗となることが確実に示唆される」。フォックスウェルは「競争の力は、途方もなく強力であり、今のところ、不可欠である」という。生産力が2割減るだけでも多くの人の生存自体が危うくなる。競争の刺激が失われるならば損失はその程度で済まない。そしてそれだ



けではなく、個人に対して過酷な独裁となる。「実際、国家組織によって置き換えられる領域と効率性が半分になるとしても、その力は個人に対して過酷な独裁制となるだろう。そのような種類の独裁制は前代未聞のものである。それは多数者による独裁制であり、逃げることも抗議することもできない独裁制だからである」(251,72)。

(公的管理の必要) しかしながら、何らかの公的な制御は確かに必要である。私的な無知と強欲に対して公的な利益を守らねばならない。フォックスウェルは、競争を火や水に例えて次のようにいう。「競争は制御され、社会の利害に役立つようになされねばならない。われわれが火や水を制御するように、われわれの目的に従わせねばならない。そのような力を勝手にふるまわせることは、そのような力の助力を全部捨ててしまうのと同じくらい馬鹿げている」。真に正しい政策は、競争という「強大な社会的原動力」を適切にコントロールして利用することである(252,73)。

(制御形態) それでは、どのような制御形態をとるかが問題となる。中央政府が直接管理するのは一般に賢明ではない。「必要なすべてのことは、公共的利益に従って然るべき知的能力と実際の効率性で制御することである。そうした条件を確保できるのであれば、分権化できればできるほど、より上手に制御できるであろう」(252,73, 下線は引用者)。自発的集団、事業者団体、あるいは地方自治体を用いることができるかもしれないが、おそらく最も良く最も効率的であるのは「良識ある世論」である。しかしながら、いずれにせよ、それに対して形と効力を付与するためには何らかの種類の「組織」が必要である。また、「指導と批判を付与し、腐敗しないようにするためには情報の公表が必要である」(253,74)。

すなわち、競争は制御されねばならず、制御するためには組織化と情報の公表が必要となる。

## [2 組織化]

(社会主義者と労働組合) 産業の組織化は、社会主義者が常に熱烈に語る題目であった。ラッサール(Ferdinand Lassalle)は、国家がすべての生産手段を獲得し、産業の種々の部門すべての活動が同じ作業場の種々の作業工程の活動であるかのように完全に制御される時<sup>34)</sup>を期待した。けれども、彼と彼の支持者はその実現にはたいして役に立たない。〈はしごよりも上に行こうとして、はしごを登らずにバネを作るようなもので、せいぜいのところ前と同じ高さになるだけである〉。フォックスウェルは、〈社会主義者の著作をすべてひとまとめにしたところで、イギリスの労働組合単独の、ささやかだが実践的な歩みほどには産業の積極的改造には進んでいないのである〉という(253,74)。

(現実の制度的変化) フォックスウェルは、雇用の安定に寄与している変化のいくつかを指摘する。

① 第1に、様々な行政事務が人口の数と必要の増大とともに着実に増大していることである。このことは多数の人々が実際上安定した雇用を得ることを意味する。ジェヴォンズはこれを問題点として捉え、〈公務員は一度雇われたならば減多に解雇されず、退職したならば年金を受けとる。それゆえ、政府が何らかの新規の仕事に着手したならば、多大の出費なしには停止できない〉と述べる。ジェヴォンズがいう出費は税金を意味するが、フォックスウェルは〈それがなぜ悪いのか?〉という。〈制御されない民間の産業において生産のあらゆる変化によって生計の道を脅かされる被雇用者の破滅と悲惨よりも、なぜ納税者の金銭的損失がより重要なのか?〉とジェヴォンズに反論している(254,75)。

② 第2に、商務院の力の増大、種々の委員会設立に見られるような政府の制御能力の発展である。「工場法の下での工場監察は、イギリスの産業の再組織化 industrial reorganisation における最大の勝利の1つである」。この種の国家の行動は雇用の安定性に直接寄与しないといわれているが、「労働者の健康、快適、安全に影響を及ぼすことにより、間接的に、労働者の稼働力の恒常性に対して大変強力な影響を及ぼしうる」(255,76)。

③ 同様のことは、地方自治体業務の拡大についてもいえる。「地方自治体業務の拡大の重要性がより認識されるにつれて、この四半世紀に、不規則な雇用を軽減する多くのことがなされると期待できる」(255,76)。

④ 会社規模の増大の結果としての産業の組織化は、雇用安定に寄与している。その代表例が大鉄道会社である。「会社が大きくなれば被雇用者の意向が強くなる。組織が複雑になれば技能を持ち信頼できる職員が不可欠となる」。固定資本の増大も雇用の恒常性に寄与している (256,77)。

⑤ 病院、学校、教会、博物館、図書館、公園など公共的用途に対する支出額の増大も、實際上、恒久的職員の雇用を伴うので、雇用の安定性を促進する (256,77)。

(新組織) フォックスウェルは労働組合が労働者階級に対して大いに役立っていることを認めているが、労働組合が産業組織の考えうる最善の形であるとは思っていない (257,78)。産業の共通の利害のために労使が同等の立場で協調する新しい組織を示唆する。「疑いなく利害の対立はある。けれども長期では、1産業の共通利害の方がそれぞれの利害あるいは対立する利害よりも優越するであろう。産業を代表する組織がそうした共通の利害を認識し取り計らう時が来ている」(257-58)。部分的には、既に、多くの産業において調停委員会があり、鉄鋼業や炭鉱業においてはスライディングスケール決定委員会などがある (258,79)。それらは今後の発展が期待される新しい成長の兆しである。フォックスウェルは、そうした組織が広い範囲をカバーして同等の基礎の上に形成された場合になされる有益な仕事として、必要な技術教育や見習条件の提供、産業の生産物の評判の維持、商標の登録・保護、産業の製品に相応しい市場を發展させ組織すること、不必要な仲介商人の排除、などを列挙している (259,80)。

(統計公社と労働公社) 各産業は統計公社 (Bureau of Statistics) と業界新聞を持つこととなる。同様に、求職者に対して、あるいは労災、貯蓄、退職金に関する相談者に対して、情報を提供し支援するための労働公社 (Labour Bureau) が設立されることとなる (259,80)。

(賃金決定) 賃金の決定は、もはや「週ごとの不確実性や市場の駆け引き」のままに放置されず、スライディングスケール制や、協約によって締結される長期の契約によってなされる (259-60,80-1)。

(その先の展望) 利害の共有感情が強くなれば、より直接的に労働者は自分の労働の生産物に関心を持ち、やがてはプロフィット・シェアリングなども導入され、協働生産に向けての道が開けるだろう。「価格を安定化し、自殺的競争を回避するため」の産出制限や注文の再分配もあるかもしれない (260,81)。

(国際的側面) そうした組織が1国に限定されるならば (最初はおそらくそうであろうが)、その成功は外国との競争の存在によって著しく制約される。けれども、それがスタートする前に多くのことがなされるであろうし、それが最終のものでもない (260,81)。イギリスの労働階級は、他国の労働階級と利害が一致することを直ぐにも認識し、他国の労働者の状態を幾分とも改善することなしには自分たちの状態を十分に改善できないことを直ぐにも理解するだろう (260-61,81-2)。

主義綱領が何であれ、この種の外国派遣使節団のような企図にすべての人が結集できるだろう(261.82)。

### [3 情報の公表]

「情報の公表がなければ、組織は腐敗し、非効率となる」。すなわち、情報の公表は、組織化と一対のものであり、それを補完するものである(261.82)。別な箇所ではフォックスウェルは「情報の公表は、思うに、組織化以上のものである」(268.89)とも述べている。

#### [3A：情報の種類]

(必要な情報) 必要な情報は、政府、地方自治体などすべての公的機関の取引に関する完全な情報である。先に提案した統計公社、労働公社も例外ではない。とくに、公的市場の取引の完全な記録が必要である。フォックスウェルはジェヴォンズ『経済学原理』を引用する(261.82)。「取引の円滑な進行と真の社会的利益のためには、実際の需要と供給の状態に関する知識が不可欠であるので、必要な統計の公表を強制することは正当であると思う。秘密にすることは大きな価格変動から利益を得る投機家の利潤に資するだけである」(Jevons [1879] p. 94)。ジェヴォンズによれば、その原理は議会で認識されていたので、イギリスの市場町で販売される穀物の数量と価格に関する統計の収集に関する法律や1868年の綿業統計法(Cotton Statistics Act of 1868)が成立した(Jevons [1879] p. 95)。「それゆえ、情報の公表を公権力が市場に強制できる時には、ほとんど常に、おそらく少数の投機家や金融家を除いたすべての人々の利益となる傾向がある<sup>35)</sup>」(Jevons [1879] p. 95)。ジェヴォンズの引用文(第4章「交換の理論」)は、完全市場の概念に関するもので、情報の種類は商品の価格と数量であった。それゆえ、フォックスウェルは次のように続ける。「けれども、現代社会のあらゆる取引は、直接の当事者以外の人々の利害に影響するという意味で、ある程度公的なものである。したがって、他にも公表が要求される多くの種類の統計数値がある」(下線部はイタリック、262.83)。フォックスウェルが挙げるのは、雇用、国民所得、消費に関する統計である(262.83)。

(統計の現状) 賃金に関する公的統計あるいは代表的統計は存在しない。雇用量あるいは雇用の安定性に関する統計は存在しない。各産業の資本量、会社の規模に関する統計はなく、株式会社の統計ですら、きわめて不完全である。富の分配に関して正確な結論を導くことができるような国民所得統計は存在しない。生産に関しては若干存在するが、消費に関しては、租税と外国貿易に関する統計から明らかになるようなものを別にすれば、大雑把な推測程度のものしかない(262.83)。

(必要な統計) すべての統計の中でもフォックスウェルがとりわけ価値があると考えられる統計は、経済全体の状態を測る物差しである。景気にかんするバロメーターとして役立つ「産業の大きな波動」が存在する。そうした波動の記録は「指数統計」というものを形成する。それらの中でも、銀行統計——最重要なものとしてイングランド銀行の公式統計を含む——、鉄道などの運輸統計、輸出入統計および関税統計、農業収穫漁獲鉱業統計、石炭鉄鋼建築材料統計は、完備され、誰にでも利用可能でなければならない。必要ならば、強制的に作成されねばならない(263.84)。

(統計は国の事業) フォックスウェルは、1880年のアメリカの国勢調査(「ウォーカー将軍によって計画された」<sup>36)</sup>)を例に、国家しかそのような統計を収集できないのであれば、国家が行うべき事業であることは明らかであると述べる。フォックスウェルによれば、公的支出の中で調査ほど真

に利益をもたらすものはない。なぜなら、それは法律を制定する上での効率性を増大させるだけでなく、法律制定を大幅に減少させるからである。国家が悪弊を除去するために細々したことに立ち入る代わりに、事実を公表すれば、世論が国家よりもずっと効率的に対処する、というのはよくあることである(264,85)。

(統計の表示方法) 報告・統計を公表する際にはグラフ化するなど、人々がより容易に理解できるように工夫すべきである。「官僚主義的専門家好みの統計の公表は、民主主義の必要にまったく適合しない」(265,86)。

### [3B：情報の公表の重要性]

(社会主義者対抗のため) 情報の公表は、社会主義者や急進的改革者の数量の誇張に対抗するためにも重要である。誇張であることが明白であったとしても、明確な公的統計がないならば水掛け論になりがちである(265,86)。

(最良の統治方法) 「社会主義者や急進的改革者は等しく統治(コントロール)の必要性を主張するけれども、世論が力を得るに連れて、最良の統治方法は情報の公表によって実現されるものである、ということが明らかになってくる」(266,87)。フォックスウェルは例証としてイギリスの議会委員会の歴史を挙げ、アメリカの鉄道料金に関する委員会報告の結論部分を引用する。「第一に、硬直的な法律の制定は実行可能でない。第二に、鉄道会社の力の乱用に対して、情報の公表が最も有効な対策である。第三に、そのような情報の公表を行い、制定される法律を遵守させるよう適宜計らうには、全国委員会が必要である」(267,88)。

(情報の公表は民主主義の本質である) 情報の公表は民主主義の前提である。「民主主義の本質は、多数による政府——それは不可能である——ということではなく、情報の公表である。情報の公表は世論を有効にし、公益を至高のものにする」<sup>37)</sup>。情報の公表は、詐欺、虚偽、抑圧に対する防衛策であり、理性的慈善のみならず、自助のためにも最も重要な条件である(268,89)。

(大衆の理性的能力に対する信頼) フォックスウェルは「古いロマンチックなノブレス・オブリージュ *noblesse oblige* に訴えることが未だ無益ではないことを願うけれども、もし無益だというのなら、代わりに、ともかく、極めて強力な情報の公表の義務 *publicité oblige* に頼ることができる」と述べる。すなわち、かつては身分の優越性に付随し、今は消滅しつつある名誉心の代わりに、ある程度は、一種の道徳的判断に頼ることができる。けれども、「道徳的判断は事実を認識するまでは働くことができない」。それゆえ、情報の公表が必要なのである。一方で、個人は民衆の中に埋もれ、責任感は薄れたが、他方で、民衆は組織化され、その声は力を持つようになってきた。一般的見解を明確に説示し十分に伝える喫緊の必要が生じている(269,90)。

「ヴィクトリア朝保守主義を特徴づけるのは、大衆の理性的能力への懐疑」(中金[1998]19ページ)ということだが、フォックスウェルは大衆の理性的能力を信頼し、情報の公表を主張したのである。

(組織化の程度と情報の公表) 「組織化を望む者は、情報の公表無くして組織は必然的に腐敗するということを銘記すべきである。他方、レッセ・フェールを唱える者——彼らにとって組織化は闘牛士の赤い布[苛つかせるもの]である——は、買手注意(*caveat emptor*)のような原則は、まさにレッセ・フェールの本質であるが、必要な情報は公的に入手可能であることを意味するということを実覚すべきである——さもなければ詐欺を合法化することになる」(269,90)。

〔個人の社会化〕 現代経済の統合性・相互依存性によって、古い個人主義は不合理なもの(an absurdity)になっている。「現代経済の視点からすると、厳密には、単なる個人といったものは存在しない」。市場価格、賃金、利潤、これらはすべて、社会的産物である。「各人の経済行為は、多かれ少なかれ他のすべての人に影響し、経済行為の手段については、各人は他の人に依存している」。それゆえ、フォックスウェルは、個人が自分の取引を公表することを求められても、あるいは共通の利害から考えられた規制に従うことを求められても、不満はいえないはずだ、という。「精妙に作られた現代社会で、複雑な文明化の便益すべてを享受して、それに伴う義務を認めずに暮らしていけると期待することはできない」。けれども、このことは共産主義政策を受け入れることを意味しない。個人主義を社会主義に置き換える必要はまったくない。「求められているのは個人を社会化する to *socialise the individual* ことである」。そしてそれを促進するのに「組織化と情報の公表」くらい有効な手段はないのである (270,91)。

### [3C：反レッセ・フェール論]

最後に、フォックスウェルは改革に反対する「最も強力で頑強な偏見」すなわちレッセ・フェール原理を批判する。フォックスウェルによれば、産業の秩序と安定性の増大によって実際に利害に悪影響が出る階級は小さな集団であるが、彼らの状況と同じであると誤解している大きな集団がある。私的利害だけが問題ならば容易に対処できる。けれども、「現在、どんな合理的な変化に対しても重大な障害となりうる唯一のものは、私的利害ではなく、大衆的偏見である」。われわれの場合、レッセ・フェールという「宿命論的で、粗雑な、反社会的教義」に直面する (271,92)。

レッセ・フェールという原理は、古い社会組織の崩壊と腐敗によって生まれ、着実に増大している「エゴイズム」と、大昔に生じた「特異な哲学上の混乱」とが合わさって生み出されたものである。それが依拠する仮定は曖昧で根拠がないにもかかわらず、その最高権威が生きていた時代には強力で有益な社会的影響があった (271,92)。新しい経済条件に適合する商工業の組織が生ずるためには中世からの古い組織は一掃されねばならなかった。社会の発展において19世紀前半のほとんど無政府状態のような個人主義の段階は必要であったのかもしれない。けれども、現在、レッセ・フェールの原理は〈ポジティブに真であり、あらゆる時代において真である〉と考えられるまでに至っている。すなわち、〈個人の自由は、他の個人を傷つけない限り、それ自体、最高度の重要性をもっている社会的善である。公的制御によって個人の自由が不当に束縛されるならば、生物の世界でも社会においても進化の第一条件である「多様性への傾向」が阻止される可能性がある〉とさえ主張されている (272,93)。

仮にそうだととしても、介入しないというだけのネガティブな政策が個人に対して一般的自由を実現すると考えることほど大きな間違いはない。それが実現するのは、〈強者が弱者を食い物にする自由〉である。それゆえ、公共的統治は理性的に適度に行わねばならないが、「組織化」は今の時代のなすべき仕事である。レッセ・フェールのような盲目的ネガティブな原理を尊重する強い偏見は障害物以外の何物でもない、ということは依然として真である (272,93)。

レッセ・フェールは、既に過去の遺物という見方もあり、フォックスウェルも政治理論として流行遅れであることは認める。しかし、フォックスウェルは次のように続ける。問題なのは絶頂期の有害な遺産である (272,93)。昔は〈自然の声は神の声 *Vox naturæ, vox Dei!*〉であった。今は〈市場の声は神の声 *Vox mercaturæ, vox Dei!*〉である。市場価格に対する低劣な宗教的礼賛が「自然」

礼賛に取って代わっている。「市場価格に影響するような既存の条件を変えるかもしれない調整はすべて『人為的』という烙印を押され、事実上、有害で不可能であるとみなされる」。けれども、市場価格は投機の結果かもしれないし、ある社会階級が必要に迫られた結果かもしれないし、彼らが無知であった結果かもしれない。市場が操作されているかもしれない。安定価格を維持する機能に関して、市場が極端に不安定で、誤作動しているかもしれない。効率的でないかもしれない。他方、提案される改革は、市場の効率性を増大させる効果を持っているかもしれない。われわれの野蛮な価値標準の変動を修正する目的のものかもしれない。重要なのは偶像崇拜の奴隷であってはならないことである。あらゆる改革案は「人為的」なのである (273,94)。

フォックスウェルは、「過去の墮落した哲学の残滓で社会的改革の道を邪魔する人に対して、ありったけの力で抗議しなければならぬ。ともかく、そうした市場の駆け引きの基礎を一掃し、それ自身の功罪で産業の再組織化を考えねばならぬ」と述べる (273,94)。

## VI おわりに：要約とフォックスウェルの結語

最後に、結びに代えて、「雇用の不規則性と価格変動」の要約とフォックスウェルの結語を記そう。

### 〔「雇用の不規則性と価格変動」の要約〕

- ① 雇用の不規則性は第一級の社会的害悪である。この害悪は除去可能であり、除去しなければならない。
- ② 雇用の不規則性を減らすという問題は、価格変動を減らすという問題に置き換えることができる。
- ③ 価格変動の原因は、基本的には、2つのグループに大別できる。
  - (1) 貨幣・銀行制度、市場メカニズムの不完全性に基づく要因
  - (2) 生産と消費に直接関連する要因
- ④ 対策の根本原理は「組織化」と「情報の公表」である。
- ⑤ 複雑な相互依存関係のある現代経済においては、たんなる個人といったものは存在しない。各人の経済活動は他のすべての個人に影響を及ぼし、また各人の経済活動のための手段は他のすべての個人に依存している。そのような社会において、利益だけを享受して義務を何も負わないということは許されない。すなわち、「個人の社会化」が求められている。
- ⑥ それゆえ、「競争」を、私利私欲のなすがままにしておくべきではなく、適切な「制御」によって競争を緩和しなければならない。
- ⑦ 最善の制御方法は「良識ある世論」である。けれども、良識ある世論に形と効力を付与するためには何らかの種類の「組織」が必要である。
- ⑧ そうした組織を指導するためには、また、批判によって腐敗から守るためには、「情報の公表」が必要である。

### 〔フォックスウェルの結語〕

種々の攪乱要因に適用できる数多くの救済策がある。それらすべての根底には、われわれが分析を始めた主題よりも広い展望を持ち、雇用の安定性だけでなく、社会改革者が主題とする人々の状

態について、雇用以外の他のすべての変化をも実現するのに役立つような全般的産業改革策がある、ということが理解されたように思う。けれども、「そうだとすると、この産業安定性の問題をわれわれに絶えず考えさせ、その解決のために何かする機会を逃さないことがわれわれの義務であることは明白である」(274,95)。

賃金と俸給との違い、手と頭脳を持つ熟練労働者と、ペンと頭脳を持つ熟練労働者（頭脳はどちらも必要である）との違い、前者は不安定な雇用で後者は安定な雇用である、ということを経営者としての基本的違いは何か？(274,95)

「何もない、とは言いません。厳しい競争が、国内においても海外においても存在し、容易でない諸困難を招いています。けれども、私は躊躇することなく言おうと思うのであります。俸給者と専門職階級が普通に享受するのと同じくらいの社会的安全性を職人と労働者階級になんとか与えることに成功するまでは、われわれは満足してとどまってはならないのです。非常に難しい課題です。王道はありません。それ1つで効果がある特効薬といったものもありません。あらゆる点から、そしていろいろな仕方でも問題に取り組まねばなりません。私は、今晚、不完全ながら、成功が期待できるいくつかの手段を挙げました。手段に関して私は間違っているかもしれません。けれども、目的に関して私は間違っているとは思いません。私の心の奥底に根付いている確固たる確信は、労働者階級のあらゆる多くの権利の中で、最も重要で、最も喫緊で、最も正当である権利は、今晚、皆さんの前に提示した、雇用の規則性の増進、これに対する権利なのであります」(274-75,95-6)。

## 注

- 1) フォックスウェルの人と業績に関しては、ケインズ『人物評伝』(JMK, vol. X)「第17章 ハーバート・サマートン・フォックスウェル」参照。
- 2) “Sir Thomas Brassey, Mr. J. Burnett (of the Engineers’ Society), Mr. T Burt, M. P., Lord of Dalhousie, Mr. Robert Giffen (President of the Statistical Society), Professor H. S. Foxwell (of Cambridge), and Mr. Frederic Harrison”, (IRC, p. viii).
- 3) 産業報酬会議については Bastable [1885] 参照。会議の参加者は、会長チャールズ・ディルク (Sir Charles Wentworth Dilke, 2nd Baronet, 1843-1911) 2名の副会長 18名の委員のほか、招待報告者 20名 (学者ではマールシャル、ニコルソン、ギッフェン、ウォレス、政治家ではモーリー、バルフォアの名がある)、商工会議所 10名、資本家団体 10名、農業団体 10名、労働組合 50名、友愛協会 10名、消費協同組合 5名、生産協同組合 10名、その他の団体 20名 (Bastable [1885] p. 623, n.)。なお、IRC 序文に参加者リストがある。
- 4) 『労働階級の権利』の扉から肩書を含めて引用する (原文は姓名すべて大文字、肩書イタリック)。“John Burnett, /Secretary of the Amalgamated Society of Engineer; /Benjamin Johns, /Manager, Co-operative Wholesale Society; /Patrick Geddes, F.R.S.E.; /Alfred Russel Wallace, L.L.D., F.L.S., & c.; /William Morris, /and /Herbert Somerton Foxwell, /Professor of Economics, University Colledge, London” (ここに記号 / は改行を表す)。なお、バーネット (John Burnett, 1842-1914) の技術工連合組合は、1851年大博覧会の頃創設され、発足当初のメンバーは12,000人だったが、1868年には33,000人となるまでに成長した。この組合は、できる限りストライキを回避するという方針であったが、バーネットは、1872年北西海岸部の有名なストライキの指導者として矢面に立ち、これに勝利して1日9時間労働を獲得した (一ノ瀬 [2011-] ⑨99ページ)。
- 5) テニスン『国王牧歌』より「アーサーの死」408行および410行 (西前美巳編 261ページ)。なお、翻訳は筆者による (以下同じ)。
- 6) ジェームズ・ステュアート『経済学原理』第1編第19章 (Steuart [1767] vol. 1, p. 120)。
- 7) Petty [1662 (1899)] p. 60. ペティ『租税貢納論』第6章「関税および自由港について」第19節、大内・松川訳 106ページ。

- 8) William Moore Ede (1849-1935)。フォックスウェルは注で、〈人が意気消沈する職探しの後、弱々しく、空の火床を見つめて座っている時、人生は悲しく、希望がない。食べるものがない。子供の食べ物もない。買う金もない。正規雇用の時に身のまわりにあったものは全部質に入っている。彼が惨めな家から飛び出して、賑やかな街をうろつき、バブで酒をおごってもらい、さらに深みにはまることを厭わないのも不思議ではない〉という部分も引用し、「私はあえてこのくだりを全文引用した。ゲーツヘッドの教区司祭は、感情家ではなく、熟練の有能なエコノミストであり、大都市の労働者階級の中で類まれな経験をしているからである」と述べている (192,13, n)。ムーア・エディはケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジ卒業。ゲーツヘッドの教区司祭 (1881-91) となる前は、ニューカッスル・カレッジ・オブ・サイエンスの歴史学教授 (1880-81)。
- 9) Arthur Foxwell (1853-1909)。ケインズ『人物評伝』によると、アーサーは著名な医者。もう一人の弟アーネスト (Edward Earnest Foxwell, 1851-1922) は東京大学で経済学および財政学の教授になった (1896-99年) (JMK, vol. X, p. 274, n)。アーネストが東大教授に就任する経緯、フォックスウェルと日本との関わりについて井上[2014]参照。なお、井上[2014]116ページの「カーディフ大学の論理学及び哲学教授のソーリー」(William Ritchie Sorley, 1855-1935) は、詩人チャールズ・ハミルトン・ソーリー (小島[2014]参照) の父親。
- 10) 「1886年にいたるまでイギリスにおいてもオフィシャルな失業統計は存在しない。1886年以降、ようやく商務省の労働局 Labour Department が毎月各労働組合からの報告にもとづいて失業統計を整理するようになった」(菊池[1977]16ページ)。
- 11) ①フォックスウェルは、「遊んでいる」量について、Baxter [1868] p. 41 と Levi [1867] p. 5 の参照を指示している (194,15, n)。Robert Dudley Baxter (1827-75) はケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ卒業後、父親の会社 (Baxter and Co.) の事務弁護士となる。『国民所得』(Baxter [1868]) などの経済学の専門書のほか政治学の専門書など多数公刊 (英語版ウィキペディア Robert Dudley Baxter)。Leone Levi (1821-1881) はイタリア生まれ、1844年リヴァプールに渡る (英語版ウィキペディア Leone Levi)。Levi [1867] の扉の肩書は「リンカーン法曹院所属法廷弁護士、キングス・カレッジ・ロンドン商学教授、テューヴィンゲン大学経済学博士」。
- ② バクスターによれば、「肉体労働者の賃金あるいは稼得」は最も推計が難しい問題で激しい論争の題目である。商務院の雑多な統計やパーディ [F. Purdy, “On the Earnings of Agricultural Labourers in England and Wales,” *Journal of the Royal Statistical Society*, vol. 24,1861] やチャドウィック (Edwin Chadwick, 1800-1890) の論文そしてレヴィの著書からの情報をバクスター自身の調査研究と照らしあわせて検討した結果、「賃金率に関する限り、レヴィ教授の書物がきわめて正確で公正である」。けれども、バクスターは「遊んでいる」量に関してレヴィを批判している。「最も重要な点は、労働者が『遊んでいる playing』と呼んでいるもの——どんな理由であれ、強制されたものであろうか自発的なものであろうか、『職についていない』——についてしなければならぬ斟酌である。私がレヴィ教授と対立するのはこの点である」(Baxter [1868] p. 41)。
- ③ レヴィは次のように論じている。雇用された人数と賃金から労働者階級の稼得を推計するに際して就業中断の時間を控除する必要があるが、その時間数は各産業の条件と労働者階級の習慣および性格に従って異なる。そこで、「60歳以上の者全員を推計から排除するという原則」を採用する。その年齢で虚弱な者の割合は必然的に大きく、その人数を控除して残る人数が、20歳以上60歳未満の者に対して、実際に働いていない者あるいは52週分の賃金を得ていない者の人数を与える (Levi [1867] p. 5)。レヴィは注を付して次の数値を与えている。「1861年イングランドとウェールズの総人口20,119,814人のうち60歳以上の人は1,460,606人すなわち総人口の7.22パーセントである。浪費された時間あるいは賃金を稼得しなかった期間は、平均で、52週のうち4週すなわち7.69パーセントの割合であると安全に推定できるだろう」(Levi [1867] p. 5, n)。
- ④ バクスターは次のように批判する。「もしそれが真の状態であるならば、イングランドは完全に労働者のパラダイスであろう。男も女も子供も各人52週のうち48週を国勢調査という労働者として完全に雇用され、賃金を満額受け取るのであれば、貧困などまったく存在しない」(Baxter [1868] p. 42)。
- 12) Antoine Eugene Buret (1810-1842), *De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France*. 1840。ビュレに関しては稲井[2007]参照。フォックスウェルは、ビュレの書物(第1巻36ページ)から、アイルランドの統計値をオーストリアの公文書から引用した箇所を引用している。「1821年、アイルランドの人口は6,801,827



人だった。1831年、人口は7,764,010人になり、10年で14パーセント増加した。最も裕福なレンスター地方では、人口は8パーセントしか増加しなかったが、最も貧しいコノート地方では、人口増加は21パーセントに達した」(198,19, n)。

- 13) Frederic Morton Eden (1766-1809)。『貧困の状態』は3巻本で2000ページの大著。イーデンについては吉尾 [1991] 参照。
- 14) フォックスウェルはFlintと記しているが、Thomas Plint (1797-1857)。*Crime in England: Its Relation, Character, and Extent, as Developed from 1801 to 1848*, p. 83。
- 15) Wilhelm Emmanuel von Ketteler (1811-1877)。ジョン・レー (1845-1915) はケトラー司教について次のように記している。ケトラー司教はラッサールの「鉄の残酷な法則 the iron and cruel law」に関する教えを全面的に受け入れた。ラッサールは、この法則の結果、ドイツの人口の96パーセントが週10シリングに満たない額で家族を養わねばならなかったと主張したが、その主張はディーテリチ [プロイセン統計局局长 Karl Friedrich Wilhelm Dieterici 1790-1859] の計算に基づくものだった。それは「まったくの推測」であり、しかも、労働者階級の家庭では通常働き手は1人ではないという事実を無視したものだ( Rae [1884] p. 232)。けれども、ケトラー司教はラッサールの主張を暗黙のうちに受け入れ、「現代の社会問題は単純で、いかにして労働者階級をこの経済法則の作用から開放するか、ということである」と述べた (Rae [1884] pp. 232-33)。この後にフォックスウェルが引用したケトラー司教の言葉が続く。なお、フォックスウェルの Rae [1884] からの引用は数ヶ所あるが、いずれもフォックスウェルの挙げるページが Rae [1884] に合致しない。
- 16) フォックスウェルは、「たとえば訓練されたスタッフを雇い続けるという重要なことなど、疑いもなく実際には他のいろいろなことをも考慮しなければならない。上で述べていることは、第一次接近として真であるということである」という注を付している。
- 17) ① [本稿末尾の図] 図の右側 (Examples of Price Curves), 上から順に、一般卸売物価曲線、鉄銹価格曲線、綿花価格曲線であり、図中には手書きで次の言葉がある。GENERAL WHOLESALE PRICES, TIN (STRAITS), IRON (Scottish Pig), COTTON (Middling Orleans)。図の下部は、CURVE OF GENERAL WHOLESALE PRICES  
From 1782 to 1886  
[100 = Average Prices 1845-1850 inclusive.]  
図中の2箇所の縦線のように見えるものは、左が GOLD DISCOVERIES, 右が DEMONETISATION OF SILVER である。
- ② [Middling Orleans] Orleans は New Orleans. middling は品質の等級で ordinary の上の品質。Middling Orleans は世界中で用いられた綿花の標準品質である。以下の南北戦争が綿花価格に及ぼした影響 (Cotton Famin) を述べている文章に Middling Orleans が登場するが、その著者は別な箇所 (Ellison [1886] p. 69) で 1859-61 年の綿花価格として  $6\frac{7}{8}$  ペンスという数字を用いている。〈1860年ヨーロッパの綿花輸入は1俵400(重量)ポンドで4,837,000バレルすなわち平均で週当たり93,000バレルに達した。そのうちアメリカ合衆国は4,058,000バレル週78,000バレル、総輸入量の83.9パーセントを供給した! 1861年南北戦争が始まり、1862年ヨーロッパの綿花輸入は1,439,000バレル週約27,000バレルに低下——そのうち南部諸州から来たものは102,000バレル週2000バレル、2年前には総供給の83.9パーセントであったのに対して7パーセントにすぎなかった。……イギリスの綿花消費は、1860年には週51,700バレルだったが、1862年には週21,700バレル、1862年11月には週18,000バレル——50万人以上の綿業従事者に対して週2日を超える程度の雇用しか提供できない——までに低下した。価格は Middling Orleans について1(重量)ポンド当たり30ペンス——年平均では24ペンスまで高騰したにもかかわらず、1863年の輸入量は1862年の輸入量を約500,000バレルしか超過しなかった。そのうち250,000はインドと中国、180,000はエジプトとトルコからであった。……1864年には Middling Orleans は  $31\frac{1}{2}$  ペンス、平均で  $27\frac{7}{8}$  ペンスであった。同じ年 fair Pernam. は32ペンス [ペルナンブーコ Pernambuco はブラジルの州。W. G. Hoffmann, *The Growth of Industrial Economies*, 1969, p. 114 には、第一次大戦前、ペルナンブーコの綿花は4085マイル離れたリヴァプールの方が1024マイル離れたリオ・デ・ジャネイロよりも価格が安かった (1909年12月、1(重量)ポンド当たりの価格はリヴァプール17.8セント、リオ・

デ・ジャネイロ 19.5 セント) という記述がある], fair Egyptian は 30 ペンス, fair Dhollera [インド産綿花] は 24 ペンスまで高騰した——その年の平均価格はそれぞれ,  $28\frac{3}{4}$ ,  $27\frac{7}{8}$ ,  $21\frac{1}{2}$  ペンスであった。けれども, そうした飢饉価格でさえも 668,000 ベイルの増加しかもたらさなかった。そのうちの 195,000 はインド, 158,000 は中国と日本, 133,000 はエジプト, 78,000 はアメリカ (封鎖突破綿花), 61,000 はトルコ, 60,000 はブラジル, 3000 はその他であった) (Ellison [1886] pp. 93-4)。〈「シリング・コットン」は 1869 年以降 1916 年 (11 月 20 日) リヴァプールで 1 (重量) ポンド当たり 12.59 ペンスとなる) まで 1 度も生じたことがなかった。1869 年以降は, 逆の境界を 2 回超えた。すなわち, 1894 年および 1898 年, 価格は 3 ペンスを下回った。1904 年の有名な Sully's corner によっても価格は 8.96 ペンスまでしか上がらなかった。第一次大戦前の数年間は, 平均価格は 7 ペンス前後であった) (Todd [1917] p. 85)。

corner という言葉は, たんなる買い占めではなく, ブル (Bull, 値上がりに賭ける買い方の投機家) がベア (Bear, 値下がりに賭けて先物売る投機家) を〈窮地に追い詰める〉ことをいう。すなわち, 現物および期近物を巧妙に買い占めて, ベアが商品を期日に引き渡そうとする時, どんなに高くても現物あるいは期近物を入手しなければならない状況を作ること。そのような状況になれば相場はますます高騰してブルの目論見通りとなる。

Daniel J. Sully (1861 年 3 月 9 日-1930 年 9 月 19 日) は, 〈アレキサンドリア, リヴァプール, ニューオーリンズ, ニューヨーク, どこでも常に「買い」のブルのリーダーで, 「ニューヨークの Cotton King」と呼ばれたが, 1904 年 3 月ベアの売り攻撃によって価格吊り上げが頓挫し, 購入代金を期日に支払えず, 敗退した。

なお, 〈アレキサンドリアの綿花取引所は, 1861 年開設された世界初の綿花先物取引所である〉(山口 [2006] 144 ページ)。

③ [時系列グラフの発明者] 「フォックスウェルは時系列グラフの発明者ウィリアム・プレイフェア (William Playfair, 1759-1823) の名を挙げている。「ウィリアム・プレイフェア——彼は前世紀末に著述した [Playfair [1801 (1786)], 私家版 1785 年, 初版 1786 年, 第 2 版 1787 年, 第 2 版のフランス語訳 1789 年, 第 3 版 1801 年] ——の時代から, [数量を位置で示す] 方法はあらゆる種類の統計研究に適用されている」(205,26)。プレイフェアの上記の書物は, 2005 年, 1801 年に出版された *The Statistical Breviary* との合本でリプリントが出版された。リプリントの序論によると, プレイフェアの書物を贈られたルイ 16 世はチャートの意味を即座に理解し, 大変喜んだ。プレイフェアは晩年に, 〈それらのチャートは, あらゆる言語で語り, きわめて明瞭, 容易に理解できる, と王は言った〉と記している (Playfair [1801 (1786)] “Introduction” p. 1)。ルイ 16 世の言葉は, 統計史家 H. G. Funkhouse の「グラフ法は直ぐに普遍言語 a universal language となった」(1937 年) という言葉に照応するとリプリントの編者が述べている (Playfair [1801(1786)] “Introduction” p. 2)。

18) グラフには TIN (STRAITS) という手書きの記載がある。STRAITS というのはマラッカ海峡のことで, マレーシアのスズは古くから知られていた。イギリス南西端のコーンウォール地方もマレーシアよりもさらに古い世界有数のスズ (および銅) の産地であった。食品保存のためのブリキ缶の使用は 1772 年オランダ海軍で始まったが (英語版ウィキペディア can opener), 19 世紀中頃, クリミア戦争, 南北戦争などで缶詰用のスズの需要が増大した。コーンウォールは世界のスズ生産の中心地となるが, コーンウォールだけでは増大する需要を満たしきれず, マレーシアのスズが大量にヨーロッパ市場に流入した。またフォックスウェルが直ぐ後で 〈1877 年以降, スズ価格に収穫減法則が作用した〉と述べているように, コーンウォールのスズ鉱山が枯渇し始め, イギリス資本はマレー半島内陸部のスズ鉱山開発を急速に押し進めた。

19) ① フォックスウェルは, 聴衆者の多くは今なお新鮮に覚えているだろうと次の名称を列挙している。Glasgow Iron Ring, American Gold Ring, London Coal Ring, Liverpool Cotton Corner。

② 1922 年首相となったボナー・ロー (Andrew Bonar Law, 1858-1923) は Glasgow Iron Ring のメンバーだった。〈アンドルー・ボナー・ローはカナダの牧師館で生まれた。父親はスコットランドの自由教会長老派牧師, 母親 (旧姓 Annie Kidston) はグラスゴウの裕福な銀行家一族の出で, 彼が 2 歳の時亡くなった。その後, 叔母 (Janet Kidston) が一家の世話をしていたが, 1870 年, 父親の再婚を契機に, 引き取ってグラスゴウに帰ることとなった。アンドルーはグラスゴウ高校を卒業後, 16 歳からキッドソン家のマーチャント・バンクで 11 年間働いた後, 1885 年, 他行 (Clydesdale Bank) との合併を契機に独立し, ウィリアム・ジャックス (William

Jacks, 1841-1907) が 1880 年に設立した銑鉄商会 William Jacks & Co. (キッドソン家の銀行の顧客であった) の共同経営者 (ジュニア・パートナー) となり、その後 14 年間、銑鉄取引に従事した。なお、リングの名称は商人が車座に座った sat in a circle ことに由来する (Taylor [2006] pp. 2-3)。

グラスゴーの銑鉄取引の状態に関しては、ロンドン在勤の商務官田原豊の明治 45 年 5 月 9 日付の報告「英国銑鉄取引状態」(明治 45 年 (1912 年) 6 月 10 日の官報第 8691 号の記事「在外公館及商務官報告」) に興味深い記述がある (ただし、以下では表記および語句、文章を改変。省略もある)。〈グラスゴーにおいては銑鉄倉庫証券を用いて先物投機取引が盛んに行われている〉。〈投機取引の本場であるグラスゴーの市場は銑鉄相場の中心で、グラスゴー取引所 Glasgow Royal Exchange における相場は直ちにミドルスバラ Middlesbrough へ電報で伝えられ、それによってミドルスバラの現物市場の価格が定まる状況である〉。〈英国においては他国と異なり、少なくとも数十万トンの銑鉄が常に各地の倉庫会社の倉庫内に貯蔵されている〉。〈倉庫証券は、品名、種類、数量、預け主氏名住所 (普通は銀行宛名が多い) 等を記載し、倉庫会社の預り証の印を押印したもので、銑鉄が預けられる際は、その銘柄、格付けについて厳重な検査が行われ、証券が預け主に交付される。証券は自由に転売され、銑鉄の現物は証券の所有者に引き渡される仕組みである〉。〈取引所では毎日午前 (11 時から 12 時) と午後 (1 時から 2 時) の立会がある。取引の多くは主として投機的売買であり、相場の高低による差金の授受をもって決済するものが多数を占める。取引に用いられる銑鉄の種類は、500 トンの No. 3 Cleveland G. M. B. が標準である [19 世紀では 500 トンの内容が異なり、300 トンの No. 1 と 200 トンの No. 3, Birch [1967] p. 238]〉。

前出の Taylor [2006] によれば、グラスゴー銑鉄市場はロンドン市場との競争で圧迫され、最終的に William Jacks & Co. は破綻、1920 年代にはボナー・ローの持ち分はほとんど無価値になった。なお、取引所の閉鎖を報じた 1950 年 5 月 9 日付の「グラスゴー・ヘラルド *The Glasgow Herald*」紙 (第 4 面) によると、“iron ring” の活動期間は 1881 年から 1914 年まで。

③ American Gold Ring は、2 人の投機家ジェイ・グールド (Jason Gould, 1836-1892) とジム・フィスク (James Fisk, 1835-1872) によるニューヨーク金市場における買い占めを指す。この金の買い占めは 1869 年 9 月 24 日の「ブラック・フライデー」を引き起こした。南北戦争と再建に伴い大量発行された連邦債および法定不換紙幣グリーンバックスの処理について、1869 年 3 月 Grant 大統領 (Ulysses S. Grant, 1822-1885) から財務長官に任命されたジョージ・バウトウェル (George Sewall Boutwell, 1818-1905, 財務長官在職 1869-73) は、財務省の金 (ゴールド) をグリーンバックスに対して販売し、入手したグリーンバックスで連邦債を買い戻す政策を実施、グリーンバックスの市場流通量を一定にしつつ、連邦債残高を 1869 年 9 月までに 5000 万ドル減少させた。金の市場規模は 1500 万ドル程度だったので、金価格は連邦政府の金売りに敏感に反応して上下した。そこに目をつけたグールドとフィスクは、政府行動に関するインサイダー情報を獲得することによって低価格で金を大量に買い、高価格で売り抜けることを画策、Grant 大統領の義理の弟エーベル・コービンに取り入り、Grant 大統領に接近した。彼らは大統領と親密であるところを見せつけて金融界における影響力を強め、1869 年 8 月から密かに金を購入し保蔵した。金の価格はグリーンバックスで上昇した。9 月になって投機活動を察知したバウトウェルは金の売却を増大しようとし、コービンと会うことを拒絶したため、コービンはバウトウェルの行動を阻止しようと長文の書簡で大統領に訴えた。ようやく大統領も自分が投機家の金買い占めの隠れ蓑に利用されていたことに気づき、コービンに縁を切るよう迫った。コービンはグールドに警告したが、グールドはフィスクらに伝えることなく、23 日から手持ちの金を密かに売却し始めた。1869 年 9 月 24 日、金 100 ドルのグリーンバックスでの価格は前日終値の  $144\frac{1}{2}$  ドルから 160 ドルまで高騰し、フィスクは 200 ドルまで上がると予想し買い続けた。正午前に、財務長官バウトウェルと会見した大統領は、金庫を開けて市場に金をあふれさせろと命令し、バウトウェルは 400 万ドルの金の売却をニューヨークに指示した。この報せがニューヨークの金取引所に伝わるやいなや金価格は 133 ドルまで低下した。株価も 20 ポイント低下し、何千もの投機家が破滅した。輸出用穀物価格は半分にまで低下し、アメリカ経済全体が数年間停滞した。政治的コネクションと優秀な弁護士のおかげで、グールドとフィスクが刑務所に入ることはなかった (ニューヨーク・タイムズのコラム On This Day: On October 16, 1869, *Harper's Weekly*, featured a cartoon about “Black Friday” and the attempt to corner the gold market, by Robert C. Kennedy. (<http://www.nytimes.com/learning/general/>

onthisday/harp/1016.html) および HISTORY IN THE HEADLINES, The “Black Friday” Gold Scandal, 145 Years Ago, SEPTEMBER 24, 2014, by Evan Andrews. (<http://www.history.com/news/the-black-friday-gold-scandal-145-years-ago>)。)

④ ヴィクトリア朝時代の軍事関連では、アシャンティ・リング Ashanti Ring が有名である。ウルズリー将軍 (Garnet Joseph Wolseley, 1st Viscount Wolseley, 1833-1913) は、1870年カナダの叛徒レイ・リエル (Louis Riel 1844-1885) 討伐のためのレッド・リバー遠征の際に見出した忠実で有能な士官連中を、(第2次)アシャンティ戦争 (Ashanti War 1873-74, 現在のガーナ内陸部に存在したアシャンティ王国に対する戦争) の時から海外遠征軍を率いる度に呼び寄せて部下とした。彼らは実戦経験を積み、昇進が早かった (ウルズリー将軍は1882年のエジプト軍事介入の際のテル・エル・ケビール (the Battle of Tel el-Kebir) で大勝するも、1884年のゴードン将軍救出作戦の失敗により、以後遠征軍の指揮を取ることはなかった)。

ナポレオン戦争以後第一次大戦まで大戦争がなかったので (植民地戦争あるいは紛争は数多い)、ヴィクトリア朝時代、多くの士官が戦いに参加しようと、長期休暇を取り、自費で戦場に行った。Farwell [1981] p. 117にはそうした事例がいくつか紹介されている。ある大佐は、1899年南ア戦争が勃発した時、長期休暇を取って自費で南アフリカに行った。その人は幸いにも現地で騎兵旅団の指揮権を与えられた。また、エジプトでゴードン将軍救出軍が編成された時、インドに駐在していたある士官は、6ヶ月の休暇を取ってカイロに行った。ここでは彼と同じように休暇を取って雇用を求める士官があふれていた。多くの士官が失望する中、彼は自分の連隊の第2大隊がカイロに来ていることを発見、そこで職を得た (1881年、陸軍大臣ヒュー・チルダウ (Hugh Culling Eardley Childers, 1827-1896, 陸軍大臣在職1880-82) は、カードウェル (Edward Cardwell, 1st Viscount Cardwell, 1816-1886, 陸軍大臣在職1868-74) の陸軍改革の中の1連隊2個歩兵大隊制——既存の2連隊を合併して新たに1連隊とし、1大隊を海外勤務、他の1大隊を本国勤務 (新兵募集と訓練) とする——を押し進めた)。

- 20) George Joachim Goschen, 1st Viscount Goschen (1831-1907)。政治家。海軍第一本部長 (1871-74 および 1895-1900)、大蔵大臣 (1887-1892)。
- 21) 金の生産は、1852年には英貨約3650万ポンドであったが、減少の一途をたどり、1884年には英貨1900万ポンドであった (218,39)。
- 22) 25パーセントは本位貨幣の価値変化に基づき、25パーセントは信用循環の影響に基づく (225,46, n)。
- 23) ラヴィントンの企業家論および景気理論に関して、小島 [2004a] [2004b] 参照。
- 24) フォックスウェルは不況が拡散する仕方の「見事な叙述」として、よく知られたバジヨット『ロンバート街』のほかに、Walker [1879] pp. 126-36を挙げている (239,60, n)。なお、バジヨットの波及過程の議論が乗数理論の先駆ではなく、販路法則に基づくものであることに関しては小島 [2004a] 参照。
- 25) 信用の逆ピラミッドについては小島 [1999] (p. 177, n. 1) 参照。
- 26) マクラウド (Henry Dunning Macleod, 1821-1902) は信用を「蒸気」の力に例え、「未熟な手による誤用」は危険だが、適切な利用は最も有益な発明の1つと述べている (小島 [1999] p. 177, n. 15)。
- 27) 「産業報酬会議」2日目にプロフィット・シェアリングについて報告したテイラー (Sedley Taylor, 1834-1920) によると、プロフィット・シェアリングは、1842年パリの内装業者 house painter [house-decorator, Taylor [1884] p. 1] ルクレール (Edme-Jean Leclair, 1801-1872) という人物が、従業員 [200人, Jevons [1882] p. 143] に通常の賃金を全額支払った上、それとは別に、純利潤の一定割合を与えるということを始めた。1844年にはパリ・オルレアン鉄道がボーナス制度を採用した。普仏戦争以後は、それまでの期間以上の進展があった (IRC p. 253)。会議ではプロフィット・シェアリングに対して、労働者をよりハードに働かせ、利潤の一部しか渡さないのではないかとという批判があったが、テイラーは〈ハードに働かせるのではなく、効率的に働かせるのであり、労働者に損失はない〉と反論した。また、帳簿を精査しなければ公正な分配はできないという批判に対して会計士の介入を示唆した (Bastable [1885] p. 628)。

ルクレールは1801年5月14日貧しい靴職人の家に生まれ、10歳で読み書きも不十分のまま農作業手伝い、次いで石工見習いとなり、17歳の時、無一文でパリに出て塗装工見習いとなった。3年後、職人となり、27歳の時、独立した。その後3年かからぬ間にルクレールの仕事の出来栄が建築家から注目されるようになり、

1834年フランス銀行や複数の鉄道会社の仕事を請け負った (Taylor [1884] pp. 3-4)。

28) ① ジョン・レーは「産業の不安定性の多くは商業統計の欠如, その結果としての無知 (ignorance and darkness) に起因する」といい, 「より多くの明かりは直ぐにでも善意の製造業者の誤算と違法な計画的投機の機会を減らす」と述べている (Rae [1884] p. 354)。レーは, フォックスウェル同様, 大部分の投機あるいは「悪意のない投機 (speculation conducted in good faith)」は価格変動を平準化すると主張している。

② 商務官田原豊 (注 19 ②項参照) は, グラスゴーにおける銑鉄倉庫証券取引について, 取引を円滑にする利点があるのは疑いないが, 銑鉄製造業者の多くは, 投機のため市価の変動が激しく, 鉄業全体から見れば製造家, [銑鉄] 消費者, 社会一般に対して害あり益なしというものが多くいい, それに対して次の3点を指摘している。①銑鉄は, 世界的商品で, 用途も広く, 産出額が巨大であり, 市価に及ぼす原因が数多くある (造船業, 鉄道事業の盛否, 世界の鉄産額の増減, 新鉄山の発見, 採掘製鉄に関する新発明など)。また, 銑鉄の需要および供給の範囲も大変広いので, 人為的に市価を左右するのは容易ではない②製造家が操業を休止するのは工場経営上非常に不利なので, 注文がない場合であっても製造を継続して貯蔵品を作る場合が多い。その場合, 倉庫証券取引を利用することによって, その製品の保険的売り繋ぎをして操業を継続できる利点がある③銑鉄の消費者も証券取引を利用することで利点がある。たとえば長期の鉄管製造請負契約を締結する鉄工場が原料である銑鉄を仕入れる場合, 一時に全部を購入するのは不利である。その都度必要な数量を時価で買い入れるのは相場が変動するため長期的には危険である。それゆえ, 所要額全部を一時に先物で買い, 必要な数量だけをその都度証券市場で転売するならば, 時価よりも低い時も高い時もあり, 相場変動より生じる危険を避けることができ, 長期契約締結の際に製造価格を精密に算定して安心して製造に従事できる。

29) フォックスウェルは注で, ジョン・レーの「社会主義者の商業統計要求は肯定できる。不正直なディーラーを除くすべての人に有益である」(Rae [1884] p. 355) という言葉を引用し, 「統計はギャンブルを阻止する。人は確実な場合にはギャンブルしない。商業予測が科学になればなるほどギャンブラーの活動領域は狭くなる」と述べている (242.63, n)。

30) 「1860年代後半になるとオーストラリアの缶詰肉が一般消費に入り込んできた。70年代後半には, アメリカ人が「圧縮調理済肉 (compressed cooked meat) と呼ぶものがシカゴから入ってきた。タンや塩漬け肉などである。……オーストラリア製であれ, カリフォルニア・シカゴ製であれ, 使われている缶は全て英国製であった」(一ノ瀬 [2011-] ⑧ 335 ページ)。

31) ① [冷凍船「ダニーデン」] 1882年2月15日, ニューゼーランド南島ダニーデン市の北に位置するポート・チャーマーズを出航した冷凍船「ダニーデン *Dunedin*」は, 98日でロンドンに到着, 羊5000頭の冷凍肉130トン进行良好な状態で輸送, 4700ポンドの純利益を挙げた。この成功を契機にオーストラリア, ニューゼーランドの冷凍肉輸出が拡大した。冷凍船「ダニーデン」は, 1874年グラスゴーで建造された鉄製帆船, 全長241フィート (73メートル), 排水量1,320トン。1881年改装してベル・コールマン (Bell Coleman) 社製の冷空気式冷凍機 [蒸気機関で空気を圧縮, 圧縮によって熱を持った空気を水で冷やし, その圧縮空気を船倉に拡散させることで船倉を冷却する装置] を搭載した。この装置は1日3トンの石炭を消費した (英語版ウィキペディア reefer ship および *An Encyclopaedia of New Zealand*(1966), *Ships, famous—Dunedin*)。

イギリスの冷凍肉輸入の増大に関して, たまたま眺めていた本 (Brown [1997] p. 106) に次の数字があった。

[イギリスの冷凍肉輸入量の増大]

年	屠体 (carcasses)
1880	400
1882	66,000
1886	1,187,000
1893	3,889,000

② [鉄製帆船] 「鉄製帆船の黄金時代は1860年から1880年に至る20年間」(一ノ瀬 [2011-] ⑧ 122 ページ)。

1869年11月17日に開通したスエズ運河は、紅海の北部が無風地帯のため、帆船の航行に適さなかった。また、〈1854年に登場した複式エンジンは、石炭消費を節約し、長距離航海のための燃料石炭搭載の問題を解消した。最初に複式エンジンを採用した船会社は、the Pacific Steam Navigation Companyで、石炭を産出しない南アメリカ航路の会社であった〉(Fay [1928] p. 169)。最初の複式エンジン搭載船は、1856年新造の「インカ Inca」(排水量290トン)と「バルパライソ Valparaiso」(排水量1060トン)。「バルパライソ」はパナマ・バルパライソ〔チリ最大の港。硝石積出港〕間の石炭消費を従来の1150トンから650トンに減らした〉(<http://www.histarmar.com.ar/LineasPaxaSA/36-PSNC.htm>)。

③ [スエズ運河] 開通当初は、運河は狭く〔水路底22メートル〕、浅く〔深さ8メートル〕、照明がなく、夜間の航行ができなかったため、通過するには平均で54時間かかった。1885年照明が設置され、1886年最初に夜間航行したP&O [Peninsular and Oriental Steam Navigation Company] の「カルタゴ Carthage」[1881年進水の客船(排水量5013トン)で鋼鉄の供給不足のため鉄製船体。サーチライトを搭載した ([http://www.clydesite.co.uk/clydebuilt/firsts/CARTHAGE\\_221.html](http://www.clydesite.co.uk/clydebuilt/firsts/CARTHAGE_221.html))] は18時間で通過した。ボンベイ航路は4500マイル短縮、横浜航路は3000マイル短縮できたので、スエズ運河の通行量は着実に増大した。

[スエズ運河の通行量 1870-1900]

年	隻数	トン数 (Net Suez Tonnage)
1870	486	654,914
1875	1494	2,940,080
1880	2026	4,344,520
1885	3264	8,985,412
1890	3389	9,749,129
1895	3434	11,833,637
1900	3441	13,699,328

この項はBrown [1997] p. 58。

④ [鉄製船体] 「イギリスでは船体に鉄を使うことに対する不安・偏見が非常に強く、1850年においても鉄製の船は新造船の9パーセントにすぎなかった。実際、海上航路において鉄製の船が木製の船を駆逐したのは、耐久性と軽量性の点で、船の建造において鋼鉄が錬鉄を駆逐してからのことである。1880年には鋼鉄船の勝利が達成された。木製船はその年イギリスで建造された全船舶の4パーセントにすぎなかった」。

イギリスにおける船の建造

	鉄製	木製
1850	12,850 トン	120,000 トン
1860	64,679	147,000
1870	255,000	161,000
1880	495,367	19,938

この項はBirch [1967] p. 225。

⑤ [榴弾と装甲艦] 軍艦に関しては、陸戦では数世紀前から使用されていた榴弾が19世紀になって海戦でも使用されるようになったこともあって、〈19世紀の後半の50年間で、それ以前の1000年間の変化をすべて合わせたよりも大きな変化があった〉(Marder [1940] p. 4)。〈1853年黒海南岸シノペ (Sinope) 港を奇襲したロシア艦隊がトルコの木造フリゲート艦7隻を榴弾で全て破壊し、3000人を死傷させた。ロシア艦隊はほとんど

無傷であった。1858年、フランスは最初の装甲艦「グロワール *La Gloire*」の建造に着手した（Addington [1994] p. 55）。グロワール（排水量 5,630 トン）は、木造船の喫水線を鉄板で覆ったものであったが、〈設計者は、木造船艦隊の中にあつては羊の群れの中のライオンのようなものと豪語した。イギリスは 1859 年に伝統的 3 層スタイルの「HMS ヴィクトリア *Victoria*」を進水させたが、グロワールに対抗する必要を認め、1860 年 12 月装甲艦「HMS ウォーリア *Warrior*」を進水させた（Massie [1991] p. 386）。ウォーリア（排水量 9,210 トン）は、鉄の骨格、鉄の船体、1250 馬力の 1 軸スクリューの機帆船（1987 年復元されて現在ポーツマスにある）。建造費は 377,292 ポンド（Brown [1997] p. 15）で、1 等戦列艦の建造費（「115,000 ポンドを超えることはなかった」（Bloch [1899] p. 98））の 3 倍以上。〈羊の群れの中のライオン〉ということが実証されたのは、1862 年 3 月 8 日のヴァージニアのハンプトン・ローズ会戦（the Battle of Hampton Roads）（Massie [1991] pp. 386-88）。南軍は鹵獲した北軍のフリゲート艦「USS メリマック *Merrimack*」（排水量 4636 トン）に装甲を施して修復、「CSS ヴァージニア *Virginia*」として就航させた。1862 年 3 月 8 日装甲艦「ヴァージニア」は北軍の木造船艦 3 隻と交戦、それぞれ沈没、炎上、座礁させた（翌 9 日、「メリマック」装甲艦改装によって急速建造された北軍の装甲艦「USS モニター *Monitor*」（排水量 987 トン）が到着、最初の装甲艦同士の戦闘となったが、両者引き分け）。

32) 『国富論』第 4 編第 2 章, Smith [1776 (1904)] vol. 1, p. 433, 『国富論 II』143 ページ。

33) フォックスウェルは注で、「組織がなければ個人では何もできないと主張しているのではない」と述べ、次のように続ける。「Liverpool Central Relief and Charity Organisation Society の 1885 年 12 月 21 日の第 22 回年次総会における演説で、Rathbone 氏 [P. H. Rathbone (1828-1895), 政治家] は、大船主の側にもう少しの徹底さとシステムがあれば、ドック労働者に対して雇用の規則性と連続性を与えることができたであろうと主張した。疑いもなく、同じことはすべての産業で当てはまる」（248,69, n）。

34) ラッサールは完全な社会主義実現までに 2 世紀の余裕を与えた（Bastable [1885] p. 633）。

35) ジョン・レーは本稿注 29 の引用文に続けて、「商業統計は、根拠の薄弱な投機を矯正するだけでなく、賃金率に関する資本と労働の争いを静める傾向がある」といい、アメリカの労働者は既にいくつかの州で設置された労働統計局（the Labour Statistical Bureaux）の統計から利益を得ている経験から、統計を強く要求していると述べる（Rae [1884] p. 355）。続けてレーは、「われわれ自身の最も権威ある経済議論のいくつかは、この種の手段を強く推している」といい、ジェヴォンズの当該箇所を引用している（Rae [1884] p. 356）。

36) アメリカの著名な経済学者アマサ・ウォーカーの息子の経済学者 Francis Amasa Walker (1840-1897)。南北戦争で負傷除隊後、准将 (brigadier general) に名誉昇進したので、同時代の経済学者から「ウォーカー將軍」と呼ばれた（経歴および経済思想に関して西岡 [1986]）。1870 年の第 9 次および 1880 年の第 10 次の国勢調査監督官 (superintendent of census)。

1880 年の国勢調査は集計に 9 年かかった。集計作業に携わったハーマン・ホレリス (Herman Hollerith, 1860-1929) が発明したタブュレーティング・マシーン (パンチカードを用いるデータ処理機械) は、1890 年の第 11 次国勢調査で使用され、集計作業は 2 年で完了した。ホレリスが 1896 年に設立した会社 Tabulating Machine Company は、1911 年に他の 2 社と合併し、Computing-Tabulating-Recording Company となり、その会社は 1924 年に社名を International Business Machines に変更した (英語版ウィキペディア Herman Hollerith および IBM)。

37) フォックスウェルは注で、シュヴァリエ (Michel Chevalier, 1806-1879) による C. R. ポーターの「有名な書物」(C. R. Potter, *Progress of Nation*, 1836, 1838) のフランス語訳の序文 (*Progrès de la Grande Bretagne*, 1837, préface, p. xii) から、シュヴァリエの「代議制ということは公表ということだ」(Qui dit régime représentatif, dit publicité) という言葉を引用し、イギリスとアメリカにおいて社会統計が他のどの国よりも普及している理由の一部としている (268,89, n)。

## 参考文献

Addington, L. H. [1994(1984)] *The Patterns of War since the Eighteenth Century*, 2nd ed., Indiana University

- Press. (松井道昭訳『18世紀以降の戦争パターン』(<http://blogs.yahoo.co.jp/matsui6520/>))。
- Bastable, C. F. [1885] “Some Considerations on the Industrial Remuneration Conference, 1885,” *Journal of the Statistical and Social Inquiry Society of Ireland*, vol. VIII part LXIII, 623–633.
- Baxter, R. D. [1868] *National Income: The United Kingdom*, Macmillan.
- Birch, A. [1967] *The Economic History of the British Iron and Steel Industry, 1784–1879*, Frank Cass.
- Bloch, I. S. [1899] *Is War Now Impossible?*, trans. by R. C. Long, Grant Richards.
- Brown, D. K. [1997] *Warrior to Dreadnought*, www.seaforthpublishing.com, 2014.
- Ellison, T. [1886] *The Cotton Trade of Great Britain*, Frank Cass, 1968.
- Farwell, B. [1981] *Mr. Kipling's Army*, W. W. Norton.
- Fay, C. R. [1928] *Great Britain from Adam Smith to the Present Day*, Fifth ed. (1950), Longmans, 1964.
- Foxwell, H. S. [1886a] *Irregularity of Employment and Fluctuations of Prices*, in *the Claims of Labour*, Edinburgh: Co-operative Printing Company Limited, 1886.
- [1886b] *Irregularity of Employment and Fluctuations of Prices*, Edinburgh: Co-operative Printing Company Limited, 1886.
- Giffen, R. [1883] “The Progress of the Working Classes in the Last Half Century,” in *Essays in Finance, second series*, 3rd edition, George Bell and Sons, 1890, chap. X.
- Goschen, G. J. [1885] *Address to the Manchester Chamber of Commerce, 23rd June 1885*, in Goschen[1905], 189–216.
- [1905] *Essays and Addresses on Economic Questions (1865–1893) with introductory notes (1905)*, Edward Arnold.
- Howell, G. [1878] *The Conflicts of Capital and Labour historically and economically considered*, Chatto & Windus, 1878.
- IRC *Industrial Remuneration Conference: The Report of the Proceedings and Papers*, (Cassel, 1885), A. M. Kelley, 1968.
- Jevons, W. S. [1879] *The Theory of Political Economy*, second edition, Macmillan. (小泉信三・寺尾琢磨・永田清訳 寺尾琢磨改訳『経済学の理論』日本経済評論社, 1981年)。
- [1882] *The State in Relations to Labour*, Macmillan.
- JMK *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, edited by D. E. Moggridge, Macmillan.
- vol. X, *Essays in Biography*. (大野忠男訳『ケインズ全集 第10巻 人物評伝』東洋経済新報社, 1980年)。
- Lavington, F. [1922] *The Trade Cycle*, P. S. King & Staples.
- Levi, L. [1867] *Wages and Earnings of the Working Classes*, J. Murray.
- Malthus, T. R. [1820] *Principles of Political Economy*, Wells and Lilly.
- Marder, A. J. [1940] *The Anatomy of British Sea Power*, Alfred K. Knopf.
- Massie, R. K. [1991] *Dreadnought*, Random House.
- Petty, W. [1662(1899)] *A Treatise of Taxes and Contributions*, in *The Economic Writings of Sir William Petty*, vol. I, edited by Charles Henry Hull, Cambridge University Press, 1963. (大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論 他一篇』岩波書店(岩波文庫)1952年)。
- Playfair, W. [1801(1786)] *The Commercial and Political Atlas*, in *The Commercial and Political Atlas and Statistical Breviary*, edited and introduced by H. Wainer and I. Spence, Cambridge University Press, 2005.
- Rae, J. [1884] *Contemporary Socialism*, Charles Scribner's Sons.
- Smith, A. [1776] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of the Nations*, E. Cannan ed., 1904, Methuen. (大河内一男監訳『国富論』(I, II, III)中公文庫, 1978年)。
- Steuart, J. [1767] *An Inquiry into The Principles of Political Oeconomy*, 2vols. Printed for A. Miller and T. Cadell.
- Taylor, A. [2006] *Bonar law*, Haus Pub.
- Taylor, S. [1884] *Profit-Sharing between Capital and Labour*, Kegan Paul Tranch.



- Todd, J. A. [1917] “The Cotton Resources of the British Empire,” in A. P. Newton ed., *The Staple Trade of the Empire*, J. M. Dent, 82-117.
- Walker, F. A. [1879] *Money in its Relation to Trade and Industry*, Henry Holt.
- [1886] *The Wage Question*, Macmillan.
- 一ノ瀬篤 [2011-] 「J. H. クラバム『近代イギリス経済史』」『岡山大学経済学会雑誌』, 「『第1巻』要綱」①「第1章—第4章」第43巻第2号, 45-63, ②「第5章」第43巻第4号 51-63, ③「第6章, 第7章」第44巻第1号, 13-31, ④「第8章」第44巻第2号, 25-38, ⑤「第9章, 第10章, 第11章」第44巻第4号, 41-66, ⑥「第12章, 第13章」第45巻第1号, 33-51, ⑦「第14章」第45巻第2号, 87-113。「『第2巻』要綱」⑧「第1章, 第2章, 第3章」第45巻第3号, 101-138, ⑨「第4章」第45巻第4号, 85-106, ⑩「第5章, 第6章」第46巻第1号, 123-147, ⑪「第7章」第46巻第3号, 61-75, ⑫「第8章, 第9章」第47巻第1号, 81-111。
- 稲井誠 [2007] 「E. ビュレの『貧困論』」大阪市立大学大学院経済学研究科 経済格差研究センター, ディスカッション・ペーパー, No. 6。
- 井上琢智 [2014] 「フォックスウェル文書に見るお雇い外国人簿記・経済学教師の雇用：東京商業学校と東京大学」『経済学論究』（関西学院大学）第68巻第3号。
- 菊池光造 [1977] 「十九世紀後半イギリスにおける労働者状態」『経済論叢』第120巻第1・2号。
- 小島専孝 [1999] 「ダヴェンポートの貨幣的マクロ経済理論」『経済論叢』第164巻第5号。
- [2004a] 「ラヴィントンの景気理論（1）」『経済論叢』第174巻第2号。
- [2004b] 「ラヴィントンの景気理論（2）」『経済論叢』第174巻第3号。
- [2014] 「ビグーの戦争経済学」『経済論叢』第188巻第3号。
- テニスン, 西前美巳編『対訳 テニスン詩集 イギリス詩人選（5）』岩波書店（岩波文庫）, 2015年。
- 中金聡 [1998] 「イギリス立憲主義の再検討（上）」『国士館大学政経論叢』第106号。
- 西岡幹雄 [1986] 「フランシス・A・ウォーカーの経済思想と初期マーシャルの経済学説」『経済学論叢』（同志社大学）第37巻第1-2号。
- 山口直彦 [2006] 『エジプト近現代史』明石書店。
- 吉尾清 [1991] 「F. M. イーデンのプアー・ロー批判」『経済学論究』（関西学院大学）第45巻第2号。

**ANALYSIS OF PRICE FLUCTUATIONS**

*Causes and Elements of Price Curves.*

Variations Due to

**I. GENERAL PRICE MOVEMENTS:**

(a) Standard of Value



(b) Credit Cycle



**II. MARKETS**

*Instability of Speculation*



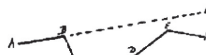
**III. CONDITIONS SPECIAL TO THE COMMODITY**

(a) Production



*A - A. Diminishing Returns. B - Scarcity of the Sources. C - Speculation.*

(b) Consumption



*A - B. Increasing Demand (Population Growth). C - Alternative Product. D - New Invention. E - Change of Habits.*

*Examples of Price Curves*

